

# 後世に生きる *Pride and Prejudice*

## —主人公エリザベスの変容性—

130107 浦 萌々理

### 序章

I love the way he talks, soft of as if he can't be bothered. *Ding-dong!* Then we had a long discussion about the comparative merits of Mr. Darcy and Mark Darcy, both agreeing that Mr. Darcy was more attractive because he was ruder but that being imaginary was a disadvantage that could not be overlooked. (215)

これは、イギリスの現代作家ヘレン・フィールディングによって著された *Bridget Jones's Diary* の一節である。ジェイン・オースティンについて少しでも勉強した人なら誰でも、上記の引用を読んで *Pride and Prejudice* を想起するに違いない。イギリスの女流作家ジェイン・オースティンによる *Pride and Prejudice* は、*Bridget Jones's Diary* をはじめ、二世紀以上に渡って映画、舞台、ミュージカル、と様々な形で翻案されてきた。本作は学問の域を越え、今では大衆文化においてその地位を確立していると言っても過言ではなく、数多くの人に愛されている。現に、大学三年次のフィールドワークにてイギリスを訪れた際に、オースティンが今でもなお、世代を超えて大衆に愛され、読み継がれているという現状を肌で感じてきた。イギリス人はただオースティンについて知っているだけではなく、それぞれ好みの作品を持ち、人々の間で意見の交わし合いが多くされているということを学んだ。加えて、オースティンはイギリスのみならず各国で愛される対象となっていることを知り、彼女への学びを深めたいと強く思ったのが本研究の出発点である。帰国後、オースティンに焦点を当て研究を進めていく過程で、彼女の他のどの作品よりも、なぜ *Pride and Prejudice* の知名度だけが特に高いのであろうか、という疑問が生まれた。よって、本論文でオースティンの *Pride and Prejudice* を取り上げ、本作が長年に渡って読み継がれてきた理由を探究する。まず本章では、作家ジェイン・オースティンの生い立ちや作風について言及した後、*Pride and Prejudice* のあらすじを紹介する。

ジェイン・オースティンは、1775年12月16日にイギリスのハンプシャー州のステイーブントンという小さな村で生まれ、八人兄弟の次女として育った。オースティン一家は家族間の絆が強く、知性と教養に富んだ一家である。彼女の文学に見られる気品とユーモアのセンスは、その家庭環境によって育まれたものであろう。父が教会の管理者を務めていた際には、家に比較的規模の大きい図書館を構えることができたため、オースティン本人にとっては最高の環境であった。しかし八人の子どもを養育するオースティン家の家計は次第に苦しくなっていたため、彼女は七歳のときに姉カサンドラと共にオックスフォード在住の親戚のもとに送られ教育を受けたが、十分なものではなかった。ただ、オースティンは十代のうちから、詩や小説を書き家族に読ませていたため、活字に困ることはなっ

た。彼女が二十六歳のとき、父に連れられて一家はバースという温泉町に引っ越すことが決まる。ステイーブントンでの落ち着いた生活を好んでいた彼女は、ショックのあまり倒れてしまったといわれているほどである。結局彼女はバースの喧騒を嫌い、結婚の拒絶や身内の死去という、大きな苦痛と悲しみを経験したため、作家活動に専念できなかったのである。父の死後、彼女はサウサンプトンに移った後、兄のエドワードのおかげでロンドン南西部の田舎町チョートンに移ることが決まり、都会よりも田舎の村の生活を好んだ彼女にとっては喜ばしいこととなった。チョートンにて小説の執筆・編集作業を進めるものの、病気の治療のため移ったウィンチェスターの地で四十二年という短い生涯を終えた。

オースティンの作風としては、田舎の一世帯や二世帯ほどの小さなコミュニティーにおける中産階級の平凡な日常を、ひたすら淡々と描いたことが特徴として挙げられる。彼女の最初の作品は *Northanger Abbey* であるが、主な作品を出版順にまとめると、1811年に *Sense and Sensibility*、1813年に *Pride and Prejudice*、その翌年に *Mansfield Park*、1815年に *Emma*、1817年に *Northanger Abbey*、そして1817年に *Persuasion* という流れとなる。いずれの作品も結婚をメインテーマに、独特のユーモアと皮肉表現を駆使しながら、読者に飽きを感じさせない軽妙な語り口で物語が進む。彼女は当時流行していたゴシックや過度なロマンスを嫌ったため、日常の生活をときには登場人物の心の中を客観的な立場から冷静に描いた。このようなオースティンが得意としている描き方は、後のイギリス文学界に大きな影響を与えたのであり、イギリス近代小説の基礎を作り上げたといえる。英文学者の小林章夫は「イギリス小説の偉大な伝統は、オースティンからヴァージニア・ウルフ、そして二〇世紀の女流作家たちへと受け継がれていった」と述べており、その理由を生きるか死ぬかの修羅場を設定せず、ただひたすら人々の会話や服装や暮らしぶりを細々と綴ることで登場人物の心の揺れ動きを伝えることに抜群の筆の冴えをみせているからであると賞賛している(99)。イギリス文学の基礎となったオースティンの代表作、*Pride and Prejudice* のあらすじは以下のとおりである。

主人公エリザベスは、イギリスの小さな田舎村ロングボーンに住む地主ベネット家の五人姉妹の二番目に生まれる。ベネット家には跡継ぎがおらず、土地や財産は父親の死後は全て親戚の男に限嗣相続<sup>1</sup>されてしまうため、母親は娘たちに良い縁談がないかと四六時中頭を悩ませている。ある舞踏会の席にて、長女ジェインは近所に越してきた金持ちの青年ビングリーと出会い恋仲になる。一方で、エリザベスは彼の友人ダーシーの傲慢な態度に反感を抱く。エリザベスは好意を持つ軍人ウィカムからダーシーの悪評を聞き、ダーシーへの嫌悪感をさらに募らせてしまう。その最中にダーシーはエリザベスに求婚するも、彼女はダーシーに自分の家族を非難された事や、彼によって姉の恋愛を邪魔された事を激しく非難しきっぱり断る。しかし後日ダーシーから送られてきた手紙によって、エリザベスはすべて自分の偏見による勘違いだったことを知るのである。後にエリザベスとダーシーは再会し、親しくなりかけたその時、末娘のリディアがウィカムと駆け落ちしたという知

---

<sup>1</sup> 血縁関係の深い男性が一族の資産を受け継ぐ権利のこと。

らせが届く。ダーシーはエリザベスの裏でリディアに働きかけ、持参金を持たせることでエリザベスの妹を救う。エリザベスは彼の寛大さと優しさに尊敬し、感謝するとともに彼の人間性を認めるようになる。一方でビングリーと姉ジェインの交際が再開し、結婚する。またダーシーとエリザベスも、互いの非を改めあい結婚を決めるところで物語は終わる。

本論では *Pride and Prejudice* が長年に渡り愛され続けた理由を、翻案作品を挙げながら探究する。その際に、主人公エリザベスをいかようにも変容できることに焦点を当てて考察していく。まず第一章では、映像作品を挙げ、現代人に向けて本作を映像化した際にされてきた工夫について述べていく。さらに *Pride and Prejudice* の出版から二世紀以上も経っている現代の文学と文化の場において、作品がどのように存在しているかに焦点を当てる。その際に、オースティンファン「ジェイナイト」たちによって引き継がれてきた *Pride and Prejudice* の文化的側面に着目し、大衆にどのようにして作品が受け入れられているかを考察する。また、*Pride and Prejudice* に関する現代ならではの文学的解釈を、帝国主義とスポーツ学の観点から考察していく。第二章では、*Pride and Prejudice* がフェミニズムの要素が強い小説なのか、それともパターナリズムの立場から解釈できる小説なのかを、主人公エリザベスの立場から検証する。両方の主張を踏まえた上で、どちらに優位性があるかを考察し、その議論の意義について考える。第三章では、国や時代によって異なる主人公エリザベスの解釈のされ方を精察する。*Pride and Prejudice* おける主人公エリザベス・ベネットの特徴を明らかにした後に、本作を土台とした各国の翻案作品を取り上げる。まず *Bride and Prejudice* を取り上げ、インドでのエリザベスの描かれ方を分析する。そして『真知子』では、エリザベスに相当する社会主義者真知子に焦点を当てる。さらに *Bridget Jones's Diary* では、エリザベスが現代のヒロインとしてどう解釈されているか見ていく。以上を通して、*Pride and Prejudice* が時代や国を越えて読み継がれている理由として、主人公エリザベスがいかようにも変容できるという点にあるのではないかという仮説を証明していく。

## 第一章 現代における *Pride and Prejudice*

本章では *Pride and Prejudice* が広く知れ渡るきっかけとなった映像作品を取り上げ、映像化した際に現代人に向けてされてきた工夫について考察する。また、オースティンファン「ジェイナイト」たちによって引き継がれてきた文化的側面に焦点を当て、*Pride and Prejudice* が現代においてどのように存在しているかを証明する。また、本作が現代の文学界においてどのように解釈されてきたかについても言及し、文化・文学それぞれの世界で愛される *Pride and Prejudice* の立場を明らかにしていく。

### 第一節 映像作品としての *Pride and Prejudice* と二つのエンディング

原作ではなく、映画作品としての *Pride and Prejudice* を鑑賞して初めてオースティンを知り、その魅力に取り憑かれた者も少なくないだろう。*Pride and Prejudice* はテレビドラマ化や映画化を通して、多くの人にとって身近なものとなっていった。本節ではそれぞれの映像作品がどのようにして生まれ、どのように工夫されているかを考察する。また、2003年に映画化された *Pride and Prejudice* のエンディングについて、アメリカとイギリスで異なっている理由とその意義について検証していく。特に、劇的なストーリー展開やメロドラマ性を期待しているアメリカ人に対して、あくまで現実に則しているイギリスの小説 *Pride and Prejudice* が映像化される上で、どのように改変されていったかに焦点を当てていく。

映像作品の中でも古典的な作品として、1940年のロバート・Z・レオナード監督によるローレンス・オリビエ、グリア・ガースン主演の映画が挙げられる。すでに舞台化されていた脚本をもとに、イギリス人著名作家のオルダス・ハクスリーが手を加えたこともあり、一躍話題になった。モノクロ映像の本作品は、同年にアカデミー美術賞を獲得している。本作品は、*Pride and Prejudice* に様々なアレンジが加えられた翻案作品であり、中でも「戦争」と「アメリカ」の要素が垣間見えることが特徴的である。

英文学者の Nora Stovel 曰く、ハクスリーが脚本を担当することを決めたのは、イギリスが宣戦布告をした 1939年9月3日のわずか数日前であった。アメリカは独自の独立政策を施行していたため、ヨーロッパ全体の戦争による混乱には陥らなかったのである。その当時のハクスリーのような知的権威者たちはハリウッドに赴き、イギリスをノスタルジックに描いた。現に、映画が公開された 1940年には、戦争の真っ只中であり、作中のエリザベスの装飾品からもイギリスを思わせる要素が間接的に読み取れるということを、Stovel は PERSUASIONS ON-LINE の自身の論文において指摘している。エリザベスは軍隊を思い起こさせるような格子の柄の帯を腰に巻き、ダーシーはイギリス兵士を象徴するかのような服を身に付けている。

また、このレナードによる映画 *Pride and Prejudice* には、作品がアメリカで受け入れられるための工夫が多々見てとれる。冒頭部分において、“It happened in OLD ENGLAND …in the village of Meryton…” と舞台設定の細かな説明をし、メリトン、ロングボーン、ネザーフィールド、ロジングそれぞれに誰が住んでいるかを明らかにした上で物語を始められていることから、*Pride and Prejudice* に馴染みのないアメリカ人でも楽しめる工夫がうか

がえる。また、エリザベスとウィカムが開始三十分以内で出会うなど、非常に展開が早い点にもアメリカ人鑑賞者を飽きさせないような配慮がうかがえる。エンディングにおいて二人が互いの誤解を見直し語り合う場面は原作に沿ったものであるが、ダーシーが“Elizabeth, dear beautiful Lizzy…”と言い愛を確かめ合う場面は原作にはなく、脚色を加えた最大の箇所である。エンディングに物足りなさを感じさせないアメリカ的な工夫である。また、英文学者で比較文学者である新井潤美は、エリザベスとダーシーがアーチェリーをするという原作にはない場面についてもアメリカ的であると指摘しており、ダーツやアーチェリーはアメリカのロマンチック・コメディ作品で好んで使用される手法であると述べている(171)。本作品でアーチェリーやメロドラマ性を取り入れられたことによって、原作の *Pride and Prejudice* の時代と当時百年ほども離れていた本作を、身近なものとして捉えることができ原作に興味を持った観客は多かったに違いない。

1995年には、イギリスの国営放送であるBBCによってドラマ化され、爆発的な人気を収めた。前述のアメリカ映画とは一転して、原作に忠実な作りとなっているのが特徴的である。序章で取り上げた *Bridget Jones's Diary* の中で、主人公ブリジットがBBCのドラマ版の作品について言及している場面がある。

BBCの『自負と偏見』を見るために着替えをする前に、ひとつ走り煙草を買いに行ってきたところ。でも、あんなに車が出ているなんて、信じがたい。みんな家についてテレビを見る支度をすべきなんじゃないの？『自負と偏見』に夢中になっているこの国の人って大好き。(323)

しかし実際は、本ドラマの放映時間になると、通りに車が見えないほどの人気ぶりだったといわれており、最終回において視聴率四十%を獲得するほどであった。新井はその成功の理由を、「古きよきイギリス」の再現に成功したからであると述べている(168)。特に、本物のカントリーハウスをロケ地としたことや、衣装の細部にまでこだわったことが視聴者を惹きつけたのであろう。現に、制作スタッフのこだわりはBBCの本作紹介ページに掲載されている“The most important location for *Pride and Prejudice* is Longbourne. So many scenes were set there, both inside and out, that it had to be the first place the production crew concentrated on finding.”という発言から明らかである。制作側は原作を忠実に再現するため、ロケ地の検討に特に力を注いだのである。しかし衣装に関しては、いかにその時代の視聴者に好まれるかという点を重視したようである。同じくBBCのウェブサイトにて制作者の意図が記されている。制作者によると、観客がダーシーに簡単に恋に落ちるよう、あえて現代的な衣装を揃えていたようである。具体的には、1990年代当時の一般人が店で買えるような服装を中心に揃えていたようであり、その結果、視聴者はダーシーの“masculinity”いわゆる「男らしさ」だけに集中できたのであると記されている。このダーシーを演じたのがコリン・ファースというイギリス人俳優であり、当時絶大な人気を博していた。

中でも当時の視聴者の中で最も話題になったのが、ダーシーの現代的な「男らしさ」が

垣間見える“Lake Scene”である。原作にはないが、全六作中四話目においてダーシーが自身の館内の庭にある池に飛び込み泳ぐシーンがある。その後濡れたままエリザベスと出会う。これは原作でダーシーの館を見学したエリザベスが、ダーシーの優雅さや優しさに気がつく場面に相当する。では、なぜBBCはあえて“Lake Scene”を設けたのであろうか。新井は、原作ではダーシーの広大な土地と屋敷を見たことがきっかけで、エリザベスがダーシーの愛を受け入れるようになったというシニカルな解釈がされることが多いが、BBCのドラマではエリザベスとダーシーという「若い男と女の間の性的なテンション」を強調することによって、原作でされやすい「シニカルな解釈」から視聴者の気をそらせる試みがなされていると指摘している(170)。BBCの“Lake Scene”では池に飛び込んだ直後のダーシーと出会ったエリザベスは、戸惑いつつも愛情のこもった優しいまなざしで彼を見つめる。この場面をきっかけに二人は一気に心を許し合い、結婚に繋がっていくという構造をBBCは強調しているのである。このBBCのドラマでは、二人が惹かれ合うきっかけとなる場面が原作よりも明確であるため、観客がよりエリザベスに感情移入しやすくなっているといえるのではないだろうか。

次にジョー・ライト監督による2005年公開作品『プライドと偏見』を見ていく。監督ジョー・ライトは1972年にロンドンで生まれ、セントラル・セント・マーチンズというロンドンにある芸術大学でアートを中心とした芸術を学んだ。幼少期から本を読んで育ってきただけではなかったため、オースティンを愛読していたわけでもなかったが、ライトのBBCでのテレビ演出家としての功績が認められたために、『プライドと偏見』の映画監督という大役を任せられ、英国アカデミー賞新人賞を見事獲得する。エリザベスに抜擢されたのはイギリスを代表する女優キーラ・ナイトレイである。彼女の知性と気の強さが主人公エリザベスとぴったり重なるため主役に選ばれたのである。

『プライドと偏見』の物語は、ベネット一家の居住の様子から始まる。原作では中産階級の設定であるにもかかわらず、映画では豚の鳴き声が聞こえるベネット家の庭先で家鴨が駆け回り、エリザベスやその姉妹は質素な衣類を着用している。そのため観客は、彼女らが中産階級の身分だとは一見思わないであろう。その小さな家には教養のない女中が何名か仕えており、ベネット家のみずぼらしさが強調されている。新井は『プライドと偏見』を、「身分違いの結婚」をするシンデレラ・ストーリーだと捉えられても不思議ではない作品として位置付けている(173)。階級の差を強調することで、エリザベスが自分の魅力とダーシーへの愛だけでそれを乗り越えたという、現代の観客でも理解しやすい構造ができあがっているのである。階級の描写以外にも、二パターンのエンディングが設けられていることから現代の視聴者への配慮がうかがえる。

『プライドと偏見』においてイギリス版とアメリカ版、それぞれ二種類のエンディングが制作された。通常イギリス版が正式なエンディングであり、日本で公開される際もそちらがそのまま使われた。イギリス版では、エリザベスが父ベネット氏のもとへ赴き、めでたくベネット氏にダーシーとの結婚の許しを得るという形で物語は終わる。ベネット氏の「メアリーやキティーの求婚者はいつでも歓迎だ。私は暇だからな。」という台詞は印象的で、まさに原作に忠実な形のエンディングであることは、次の原作の引用から明らかであ

る。

しばらく彼女を笑ってから、やっと彼女を解放したが、彼女が部屋を出てゆくとき、いった。「だれか若い男たちが、メアリかキティのことできたならば、ここへ通してください。わたしはよくよく暇なのだから」(493)

上記の引用からわかるように、本映画作品のエンディングは原作に忠実である。オースティンに長年親しんできたイギリス人にとってこのようなエンディングが好まれるのは無論不自然なことではない。新井はこのエンディングについて、オースティンらしいドライなユーモアが添えられていると評価している(173)。

ジョー・ライト監督はイギリス人以外にも作品に親しんでもらうため、イギリス版エンディングに一場面を付け加え、アメリカ版として新たに制作した。前述したように、イギリス版はベネット氏の一言で物語を終えるが、アメリカ版はその後にダーシーの館であるペンバリーへとシーンが転換する。時は夜、薄明かりが灯る中でエリザベスとダーシーは池の前のベンチに腰を掛けている。エリザベスがダーシーに向かって「[これからあなたのことを]何と呼べばいい?」(挿入筆者)と尋ねる。するとダーシーはからかって、エリザベスの機嫌が悪い時はダーシー夫人と呼ぼうと返答をする。するとエリザベスは次のように照れながら答える。「だめよ、ダーシー夫人と呼ぶのは最高に幸せな気分の時だけよ。」このように返答したエリザベスに対し、ダーシーは彼女に何度も優しい口づけをし、二人の幸せそうな横顔を最後に本映画の幕が下りるのである。いかにもメロドラマチックで現代的なハリウッド映画のようなエンディングである。アメリカ版のエンディングではそのメロドラマ性が強いため、原作の結末にてベネット氏によって醸し出されている「ユーモア的余韻」が感じられない。しかし、ハリウッド映画に長く親しんできたアメリカ人にとってイギリス版エンディングは物足りないものであり、先に述べたようなロマンスの要素を求めることが多いのである。ちなみに新井曰く、アメリカ版エンディングはイギリスでは不評だったため、公開されなかったようである(173)。

新井はまた、この二パターン of 結末に関して「イギリスのシニシズムとアメリカのセンチメンタリズムを示す、象徴的な逸話である」(173)と述べている。大辞林第三版によるとシニシズムとは「社会風習や既存の価値・理念などに対して、懐疑的で冷笑するような態度をとる傾向」とあり、一方でセンチメンタリズムは「感性を大切にする態度、物事に感じやすく、感情が動きにくい傾向」と定義されている。前者のシニシズムとはまさにオースティンの皮肉そのものであるだろう。そのような「ドライなユーモア」をイギリス人は好む傾向であるのに対し、アメリカ人は感性を大切にするような単純明快なストーリー展開を好む傾向がある。異なるエンディングを設けたことで、両者の国民性に沿った *Pride and Prejudice* を再現することに成功したといえるだろう。

本節では *Pride and Prejudice* が映像化されるにあたって、鑑賞者に向けてされてきた工夫について考察してきた。1940年のローレンス・オリビエ主演の映画では、当時の戦時中を思わせるような柄や小物を取り入れたり、ハリウッド映画のようなアレンジを加えてい

たりという工夫が見られた。1995年のBBCのドラマでは、「古きよきイギリス」を再現しただけではなく、官能的な場面を強調したことで視聴者の興味を惹くことに成功した。2005年のキーラ・ナイトレイ主演の映画では、誰が見ても階級差が一目でわかるような工夫がされていることから、視聴者にとってわかりやすい構造になっている。またイギリス版とアメリカ版で二つのエンディングを設けたことは、*Pride and Prejudice*がイギリス国内のみならず、アメリカでも受け入れられるきっかけとなったのではないか。二百年以上もタイムラグのある原作 *Pride and Prejudice* が、現代でも生き残っている要因の一つにロマンス要素が含まれているからであろう。二つのエンディングを設けることで、そのロマンス要素の持つ可能性を広げることに成功しているのである。このようにして、*Pride and Prejudice*を映像化していく上で、原作に新たな場面や要素を加え、現代人の好みに合わせるといふ工夫がされていることがわかった。ゆえに原作 *Pride and Prejudice* は、映像化され続けてきたことで現代の大衆文化に息づいているのである。

## 第二節 文化と文学における *Pride and Prejudice*

本節では *Pride and Prejudice* の現代における文学的解釈や文化的側面に触れ、本作が現代まで読み継がれてきた理由を様々な角度から検証する。ジェイナイトが率いる *Pride and Prejudice* の文化的側面について言及したのちに、現代の文学界において *Pride and Prejudice* をどのように解釈することができるかについて考察する。

*Pride and Prejudice* が大衆文化にどのように広まり、どのような価値を持つかを考察するにあたり、オースティンのファンの総称である「ジェイナイト」にまず言及する。「ジェイナイト」とはオースティンの熱心なファンのことを指す。新井によると「ジェイナイト」という言葉は、1894年に新たに出版された *Pride and Prejudice* の序文で、文学者ジョージ・センズベリーが初めて使用したとされている。この時期のジェイナイトは、主に学者や編集者等の男性が中心であり、高学歴である彼らは自分たちが特別な感性をもってオースティンの作品を読んでいるという自負を持つ人が多数であったとも新井は述べている(160)。現代では圧倒的に女性のファンが多いというイメージがあるだけに、ジェイナイトの発端が男性であることは意外な事実であろう。ではどのようにして、何がきっかけでジェイナイトが広がっていったのであろうか。新井は、小説を研究としてではなく、楽しむために読む「一般読者」の中でも熱心なファンたちが「ジェイナイト」と呼ばれるようになり、また自らをそう呼ぶようになっていったと述べている(165)。これが現代のジェイナイトに繋がるものであると考えることができる。また、前節でも述べたようにBBCのドラマ化によって *Pride and Prejudice* の人気が高まり、女性の間で俳優コリン・ファースが演じたダーシーが一躍大人気となったことも、ジェイナイトの広がり大いに貢献したであろう。

*Pride and Prejudice* は前節で述べた映像作品だけではなく、ミュージカルという形においても改変されてきた。例えばミュージカル作品 *Austen's Pride* はオースティン自身の人生と *Pride and Prejudice* のストーリーを織り交ぜ合いながらストーリーを展開するといった作品で、アメリカのフィンガーレイクで2016年7月に上演されていた。小説からミュー



ジカル作品に新しく姿を変えた *Austen's Pride* であるが、その斬新な発想はファンを驚かせたことだろう。またオースティンのゆかりの地の一つでもあるバースには Jane Austen Centre という博物館があり、世界から多くの観光客が訪れている。Jane Austen Centre はオースティンツアーというものも主催していて、ダーシーに扮したツアーガイドがオースティンゆかりの場所を案内してくれるのである。歴史的背景やオースティンについての説明だけではなく、小説の有名な一説を朗読風を読み上げてくれるというサービスもあり、ジェイナイトを十分に楽しませるものとなっている。

これまで述べてきたように、この世にジェイナイトが存在する以上、オースティンは現代の世界に生き続けるのであろう。英文学者の Marilyn Francus も彼女の *Austen Therapy: Pride and Prejudice and Popular Culture* と題した論文の中でオースティンを次のように位置づける。

The Austen industry satisfies the consumer's desire for more Austen by providing "Austen" products and experiences, and in so doing, services an Austen fandom by reaffirming Austen's genius and augmenting the cultural presence of "Austen."

上述の引用より、映像作品や博物館やツアーなど、これまで挙げてきた *Pride and Prejudice* に関する文化は、オースティンのファンすなわちジェイナイトの欲望に応えていることがわかる。また、大衆に向けたこのような文化は、オースティンの素晴らしさや存在意義を人々に改めて周知してくれる役割を果たしているとも考えられる。

次に、*Pride and Prejudice* の現代における学問的解釈のされ方を、帝国主義とスポーツ文化の観点から検証する。オースティンが生きたのは十八世紀であるが、時代の流れに沿って次々と新たな文学研究が為されてきた。例えば *Mansfield Park* は帝国主義と結び付けて論じられることが多い。*Mansfield Park* を帝国主義的拡張の促進を象徴する小説だという考えは、帝国主義の展開が顕著になった十九世紀後半以降に生まれた。文学批評家の E・W・サイードは、移民の移送、大規模砂糖プランテーションの機能、砂糖市場の発展などの構造が *Mansfield Park* の中に描かれていて、「植民地が宗主国に対し完全に従属し吸収される」さまが読み取れると指摘している (177)。イギリスという権力を持った大国が、砂糖等の富を得ることのできる弱者を植民地にしてきたという事実を、オースティンは貴族や中産階級をイギリスの象徴として描き、帝国主義を示したのではないかという解釈ができるのである。*Pride and Prejudice* においても、このような帝国主義が読み取れる作品として解釈することもできる。軍人であるウィカムの女性への態度に帝国主義の要素が見受けられるのではないか。ウィカムは中尉に任官することになっている士官であり、作中では「容姿はりっぱで、姿はよく、(中略)すべての美の精粹をあつめていた。」(100)と紹介されている。彼を見て惹きつけられない女性はいないほどであった。さらに、「彼の魅力を完全なものにするには、軍服さえあればよかったからだ」(100)という部分から、士官であるという権力の強さがうかがえるゆえに、ウィカムそのものを権力の強い「宗主

国イギリス」と捉えると、彼の軍服は前述で示したイギリスの欲していた「砂糖等の富」に値する。つまりウィカムを、権力を持った大国であると位置づけることができる。そのウィカムが財産存続の権利を持たない、いわゆる弱者エリザベスに近づく。エリザベスは彼と話すうちに、「彼をなみなみならぬ人だと思ふ」（104）ようになり、心惹かれていくのである。それだけではなく、エリザベスは彼の作り話に騙されてしまう。ここで財産権を持たないエリザベスを弱者「植民地」と捉えると、エリザベスがウィカムに都合の良いよう扱われ騙されるさまは、権力を持つ宗主国が弱者である植民地を従属しているかのようである。つまり、まさにサイドが *Mansfield Park* で見出した、「植民地が宗主国に対し完全に従属し吸収される」という構造が *Pride and Prejudice* においても見受けられるのである。

また *Pride and Prejudice* を、スポーツ文化発祥の小説として読むことができるという新たな解釈がされている。本作にて舞踏会の描写が多いことは前述でも記したとおりであるが、この舞踏会こそがスポーツの根源にあると体育大学教授の稲垣正治は指摘している。稲垣によると、例えば作中には舞踏会の進め方を改めたほうが良いという意見や、踊りの代わりに話し合いがあった方が「合理的」だという発想が描かれている点において、それらの「合理的」さがスポーツ史の根源にあるという（14-15）。フットボールや競馬などのイギリスの「伝統的民衆娯楽」は「合理化」の考えを根本に発展したのである。稲垣は、「合理化」とは暴徒化しないようにと一定の法秩序のもとに管理されることであると位置づけ、この思想が十八世紀から十九世紀にかけて重要視されたと指摘する（15）。ゆえにオースティンの描いた「合理的」な舞踏会がイギリスのスポーツ文化を形成する土台になったといえるのである。また、スポーツの「シーズン制」の起源も *Pride and Prejudice* にあると考えることもできる。稲垣は、作中で春から秋にかけて「野外遊戯」として狩猟や釣り、遊楽旅行、海水浴などの話題が展開されるが、冬になると室内遊戯のビリヤード、カード、舞踏会、散歩等に限定されてしまうところに着目し、これによって「シーズン制」のようなものが徐々に形成されていったのではないかと指摘している（17-18）。*Pride and Prejudice* がスポーツ文化の発祥として解釈されうる日が来るなど、はたしてオースティン本人は当時想像できたのだろうか。時代が進むにつれ、このような新しい観点から解釈がされ始めているのである。様々な角度から学問的にアプローチできるところに、まさに *Pride and Prejudice* の作品の意義があるのだろう。

本節では、現代における *Pride and Prejudice* を文化と文学の観点から考察してきた。*Pride and Prejudice* の文化については、ミュージカルをはじめ、ダーシーによるツアー等が、気軽に体験できる文化としてジェイナイトを中心に広がってきた。これにより *Pride and Prejudice* が、我々現代人に親しみやすい存在としての地位を確立しえているということができよう。文学界においては、帝国主義やスポーツ文化の観点から本作を読み解くことが可能であることを見てきた。後に言及する古くから論じられている解釈に加え、このようにして近代的な文学的アプローチがされることで、作品における新たな価値を発見することができるという点に面白さがあるのだろう。このようにして、*Pride and Prejudice* は文学や文化の両面において現代に生き続けているのである。

第一章では、現代の我々の文化にどのようにして *Pride and Prejudice* が息づいているのかを調査した。まず、映像作品を通して *Pride and Prejudice* が文化に受け入れられるようになった経緯を見てきた。特に 2005 年に公開された映画ではロマンチックなエンディングをアメリカ版として設け、観客の期待に沿った作品にリメイクしている。現代の観客でも理解しやすい構造として改変していることから、*Pride and Prejudice* がより大衆に近い存在になってきたことがわかった。*Pride and Prejudice* に関するミュージカルや、ツアー等の文化の広がりによって、作品が現代人に親しみやすい存在としての地位を確立していることも証明してきた。また、文学の世界において、古くからされてきた議論だけではなく、作品を帝国主義やスポーツ文化と結びつけるという新たな解釈ができることを紹介した。つまり、*Pride and Prejudice* は様々な形で現代に生き続け、そして愛され続けているのである。では、なぜオースティンの他作品ではなく *Pride and Prejudice* だけがここまで愛され、読み継がれてきたのだろうか。次章からはその理由について考察していく。

## 第二章 *Pride and Prejudice* をめぐる論争

*Pride and Prejudice* が後世において読み継がれている要因の一つとして、主人公エリザベスをめぐって様々な解釈がされていることが挙げられる。そこで本章では、*Pride and Prejudice* を「フェミニズム」と「パターナリズム」の観点からどう読み解くことができるかについて、エリザベスに焦点を当てながら検証していく。

### 第一節 フェミニズムから解釈される *Pride and Prejudice*

フェミニズムの立場から行われる文学批評が、今日の批評全体の中でも最も精彩に富むものの一つであると英文学者の富山太佳夫は述べている (3)。しかしながら、フェミニズム文学の伝統を形成するものとされてきた作品を、これまでされてきたフェミニズム批評の成果を踏まえたうえで読み直されなくてはならないとも彼は強調している (8-10)。*Pride and Prejudice* においても、長年に渡りフェミニズムの批評を巡って様々な議論が行われてきた。本節では、主人公エリザベスに焦点を当てながら、*Pride and Prejudice* をフェミニズム作品と捉える主張を基にして本作の解釈を試みる。

そもそも「フェミニズム」という言葉は、使用され始めたのは比較的新しく、OED でもまれな例として「女性的特質」という意味で 1851 年に初出例を挙げているものの、言葉そのものは 1895 年から使用され出したと現代アメリカ文学者の小山敏夫は述べている (139)。小山は「フェミニズム」を「男女同権主義 (論)、女性拡張運動」と訳しており、時代とともにその意味するところが変化するものであることがわかる。では、*Pride and Prejudice* のどの場面から「フェミニズム」の要素が読み取れるのであろうか。

まず、*Pride and Prejudice* における舞踏会での求婚場面における主人公エリザベス・ベネットの行動に着目する。そもそもオースティン作品には「舞踏会」の場面が数多く登場する。*Northanger Abbey* では主人公が「舞踏会」で上流階級の文化を学び、*Mansfield Park* では主人公が「舞踏会」にて初めて上流階級の文化を学ぶ。本作においても「舞踏会」は物語展開のきっかけの場であると考えることができる。実際に十八世紀と十九世紀に舞踏会はイギリスの社交界において大きな発展を遂げた。ロンドンに遊びに来る貴族や上流階級の人々によって広められ、舞踏会文化が根付いたのである。音楽講師の廣田美玲は、特にオースティン時代の中産階級の女性は「ガヴァネス」<sup>2</sup>になる以外には結婚でしか生活を確保する道がなく、舞踏会は未婚の女性にとって男性に自分をアピールする場であった述べており、その場を「常にマナーが尊重される舞踏会といったレベルでの保守的な制度」と定義づけている (169)。「舞踏会」を「保守的な場」と位置づける廣田の主張を前提に、舞踏会でのエリザベスの態度を姉のジェインと比較する。

ベネット家と財産に恵まれた男性二人が初めて出会うのはまさに「舞踏会」である。父の財産を受け継いだ好男子ビングリーは姉のジェインの美しさに惚れ、彼女に二度ダンスの誘いを申し込む。これが契機になり、ジェインも控え目ではあるが彼に好意を寄せることになる。後に展開の紆余曲折はあるものの、最終的にそのまま二人はめでたく結婚する

---

<sup>2</sup> 家庭教師の意。

という点において、舞踏会でのジェインは保守的な女性の行動を示していると廣田は指摘する（177）。それに対しエリザベスは、最初の舞踏会にてビングリーの友人で名門の出であるダーシーに悪い印象を抱く。彼女は、舞踏会に対する彼の態度や彼女を拒絶した事実を滑稽に周囲に話すものの、彼をうぬぼれ屋で虚栄心の高い人間だと非難し続けるため、彼の誘いをうっかり受けてしまったネザーフィールドの舞踏会における二人のダンスの場面では、「保守的な場」としての雰囲気は感じられない。

二人はしばらく一言も口をきかずに立っていた。彼女は、二人の沈黙が二回の踊りの間じゅうつづくのではないかと思いはじめ、最初のうちは、自分からそれは破るまいと決心した。（中略）

「書物のことはどうですか」と微笑しながら、彼はいった。

「書物ですって—それはだめ！—きっとわたしたちは、同じものを読んでいないか、同じ気持ちで読んでないかでしょうよ」（124）

地位の高いダーシーを相手に、エリザベスは挑戦的な姿勢であることがわかる。姉ジェインの保守的な求婚行為と比較すると、エリザベスは保守的な慣習に真っ向から対立していることが明らかであろう。エリザベスに古くからの伝統や因習に縛られた制度、すなわち保守的な制度と交渉させることで、オースティンは新しく自由な人物形成に成功したといえたと廣田はフェミニズム的な観点から主張している（181）。イギリスの長きに渡る保守的ともいえる伝統に疑問を持ち、反論するというエリザベスの姿勢が、フェミニズムの象徴であると読み取ることができよう。

文学者の末森恵子は、*Pride and Prejudice* を論じる上で、男性との関わりを象徴する「結婚」の枠組みの内部に作られた、女性中心の世界を検討することが必要であるとし、エリザベスがどのように古き伝統に対抗しているのかに焦点を置いている。本作において、父権的教育を排除したうえで成立する女性中心の世界こそがエリザベスの成長を促進させる要素であると末森は論じている。本章では、まずエリザベスの友人シャーロットの生き方に注目する。末森は、伝統的な女性観をそのまま彼女に押しつける役割を担う牧師コリンズとの結婚を、自らの意志で選択するシャーロットに着目している（30）。シャーロットはエリザベスの信頼できる良き友人であったが、コリンズとの結婚を選んだシャーロットをエリザベスはなかなか受け入れることができず、「かわいそうなシャーロット！彼女をこんな男の相手にしておくのは心が痛むことではないか！」（284）と嘆くほどである。しかしエリザベスは、シャーロットが結婚生活の中で夫の卑劣さに耐え、一人の時間を積極的に設けるなどと工夫をしていることを知り、徐々に考えを改めていくのである。末森は、シャーロットを見たエリザベスが、シャーロットの生き方が唯一の社会との折り合いをつける道であると学ぶと論じている（31）。

「あの人〔コリンズ〕は自分を受けいれてくれるような、そして受けいれたとすれば幸福にしてくれるような、ごく数少ない賢い婦人の一人に出会ったのだと、彼の

友人たちがよろこぶのも無理はありません。(中略) まったく幸せそうですね。それに、損得の上からみれば、あの人にとってはたしかに良縁ですわ。」(挿入筆者 236)

上記のエリザベスの発言より、彼女がシャーロットの選択は間違っただけではなかったのではないかと当初のシャーロットに対する批判を改め、コリンズとの結婚を認め始めたことが読み取れる。末森は、このようにしてエリザベスがシャーロットなりの幸福の形を認めるに至ったとし、シャーロットの経験から結婚の形について学ぶことができたという点で、父権的教育が排除された女性中心の世界が成立していると述べている(31)。つまり、男性による影響は一切なく、エリザベスはシャーロットという友人によって人間的成長を遂げたのであるという主張である。

エリザベスの精神的成長を手助けするのはシャーロットだけではない。エリザベスにとって身近な存在である姉のジェインもまた、エリザベスを「教育」する存在であると読み取ることができる。汚れた心を信じず、清らかさが強調されるジェインは、十八世紀イギリスにおける典型的なヒロインを彷彿させる女性である。つまり彼女は、美人で控え目な、男性のプロポーズを一度で承諾するようなヒロインの象徴である。エリザベスは彼女の純粋すぎる心を理解できずにからかうのであるが、ダーシーへの偏見に気づいた際に、姉に対する評価を見直すことになる。

「わたしは、なんて見下げはてたことをしたのだろう！」と彼女は心にさげんだ。「自分の見識を誇っていたわたしが！自分の能力を誇っていたわたしが！姉の寛大な公平さをよく軽蔑し、役にも立たず非難すべき不信の心に、虚栄心を満足させていたわたしが！今気づいてみれば、何という恥だろう！でも、何と当然の恥だろう！」(中略) ジェインについての彼〔ダーシー〕の解釈が正しいということ、否定することもできなかった。ジェインの感情は熱いものだったとしても、外にはほとんどあらわれず、その様子や態度にはいつも変わらず、はげしい感受性とはあまり縁のない、満ちたりた色が見られるということに思ってみた。(挿入筆者 273-274)

上記の引用より、エリザベスが、ジェインの美しさや大人しさを称えるベネット夫人らとは異なり、彼女の誠実さや美徳に畏敬の念を持つようになったことがわかる。つまり、エリザベスは人を外見のみで判断するのではなく、内面を深く知っていくことが大切であると気がつくのである。末森も、エリザベスが姉ジェインに対する自らの不当な評価に気づくのは、彼女の成長を表すための確かな指標になると指摘している(31)。これまで述べてきたシャーロットとジェインとの関係性から、末森はそのような女性コミュニティの教育こそが、*Pride and Prejudice*に描かれる独自の「教育観」を表しているのだといえると結論づけている(34-35)。女性中心の世界を作り上げることによって、より深い女性の繋がりを築いているのであるという、フェミニズム的観点から本作を捉えた主張である。しかし、このフェミニズム的観点からの主張には限界があるのではないだろうか。確かにエリザベスがシャーロットから新たな結婚観を学んだり、ジェインから人間の内面の重要性

を学んできたりしたという点は、エリザベスの精神的な成長に大きな影響を与えているであろう。この末森の主張は、ダーシーや父であるベネット氏の存在を排除しているがゆえに説得力に欠けるのではないか。エリザベスは女性だけではなく、父親やダーシーなど男性との関わりにおいても成長を果たしていると読み取ることができると考えられ、女性の世界だけに限定してしまうのは無理があるのではないだろうか。この点に関しては、次節で男性とエリザベスの関係性に注目していくことにする。

これまで述べてきたように、エリザベスが周囲の女性たちからの教育によって精神的成長を遂げたことや、「舞踏会」を例とした保守的な制度をいとも簡単に破る快活さを考えると、*Pride and Prejudice*はフェミニズム作品と位置づけることができるとフェミニズム論者は主張し、形式的には父権制が成り立つものの、その中に「女性中心の世界」があることを強調している。しかし、次節でも述べるが、エリザベスにはもともと父親譲りの知的さが備わっていると捉えることができ、ジェインやシャーロットによってエリザベスが精神的成長を遂げたと断言することはできないのではないか。さらに、本作には「女性中心の世界」が描かれているとの主張も、作中の男性の存在が単に排除されている論であると考えられるため、説得力に欠けている。実際に、エリザベスの成長は、ベネット氏やダーシーによるものだと父権主義を支持する学者は反論している。次節では、これまで提示したフェミニズム的解釈を踏まえた上で、対立するパターンリズムの観点から *Pride and Prejudice* を考察していく。

## 第二節 パターンリズムから解釈される *Pride and Prejudice*

オースティンは保守主義作家であると論じる者も多い。英文学者の辻建一は、オースティンの作品の結末を考慮すると、彼女が「保守的な価値観」を物語の結末で結論づけていると述べており、「[作品の結びにおいて] 結婚という大団円が訪れることで、美德の持ち主〔ヒロイン〕はこのような形で報われるのだという教訓を、女性の読者に示しているのである」(挿入筆者 51) と主張する。現に、*Pride and Prejudice* においても主人公エリザベスが紆余曲折を経て、最終的に資産家で名門の出である紳士ダーシーとの結婚に落ち着くのである。本節では前節に反し、保守的な観点から論じられるパターンリズム的観点から作品を解釈していく。

そもそも「パターンリズム」とは日本語に訳すと「父権主義」「父性主義」(中略)と訳され、社会的な関係において成立している父と子のような保護及び支配の関係を意味する」(112)と英文学者の新井英夫は唱えている。オースティンが執筆活動を行っていた時代はまさに、男性は女性より優越した存在であると信じられていた時代であった。英文学者のメリン・ウィリアムズは、十九世紀の小説界において、女性が家族の者たちの望むことより自分の望むことを優先させるなら、何ら尊敬に値しないという考えが持たれていたと強調している。そして「小説のヒロインに対して、まず第一に権利を持つのが父親である」(48-49)と説いており、父親は母親よりもずっと重要な存在であると主張している。ウィリアムズ曰く、オースティン自身もこれを認めていると *Emma* を例に挙げながら論じている。主人公のエマは幼い頃に母親を亡くし、分別のない父親と優しい家庭教師に甘やかさ

れて育てられるがために少々自我の強い娘へと成長してしまい、友達関係や恋愛に対して様々な苦勞をするが、最終的に大地主で美德の持ち主ナイトリーと結婚するという物語である。ナイトリーと結婚することとなるエマだが、病弱で心配性の父親を一人にしておくことはできないと言ってナイトリーを悩ませる。

「父上の幸せをおびやかさずにきみと結婚するには、どうすればいいかな？」

彼が言い終わらぬうちにエマは答えた。

「お父さまが生きているあいだは、いまの生活を変えるわけにはいきません。お父さまのもとを離れるわけにはいきません」 (*Emma* 326)

以上の引用より、エマにとって父親は絶対的な存在であることがわかる。結局ナイトリーは父親の住むハートフィールドの屋敷に移り住み、エマとその父親と生涯を共にするという決断をせざるを得なかったのである。このことから、オースティン自身が「父親」の権力を重要視しているのではないかというウィリアムズの論は説得力があるといえよう。「父親」の権力とはすなわち「パターナリズム」であると考察する。では、*Pride and Prejudice*における「パターナリズム」はどのようなものであろうか。新井は「子」であるエリザベスが、ベネット氏とダーシーという二人の「父」によって保護を受けることで、精神的成長を遂げているという点が本作におけるパターナリズム要素であると述べている(122)。ここで新井はエリザベスが男性二人の教育下において自身の成長を遂げたと主張している。中でも *Emma* の引用でも述べたとおり、オースティンのパターナリズムにおいては、特に父親の影響が大きいと考えられるため、エリザベスの父親ベネット氏の持つパターナリズム性に着目する。

父親であるベネット氏は、娘の経済的な幸福ばかりを願っている愚かな母親ベネット夫人とは対照的で、感情に流されることなく常に冷静である。小説の冒頭にて、大金持ちビングリー家と親密な関係になることを目論んでいるベネット夫人が、ベネット氏にビングリー家に挨拶をしに行くよう懇願する場面がある。彼女の熱意とは打って変わってベネット氏は至って冷静で、挨拶に行くつもりはないと断言しつつも、実際には一人で彼のもとを訪れていたのである。この行為について英文学者の門田守は、「父親が娘の幸せを願っている」ことの表れであるとし、同時に自制を欠く妻が勝手にビングリー家と交際を始めようとして失態を犯すのを制していると述べている。さらに門田は、ベネット氏が人を判断するにあたって外見や階級等のステータスだけではなく、相手の心の内情を知ることが大切だという価値観を持ち合わせている「理性的な観察者」であるとも説いている(132)。エリザベスは、父のその価値観を間近で学び、「理性的な観察者」となっていくのである。現にエリザベスは父親に絶大な信頼を寄せていて、彼女が重大な局面を迎える度に友人や姉だけではなく父のベネット氏にも欠かさず相談する。ベネット家の親類で限嗣相続者であるコリンズが、エリザベスに結婚を申し込んだ際のベネット氏の助言を例に挙げる。そもそもコリンズとは、自分を過大評価する非常識な牧師である。そんな彼からプロポーズをされたエリザベスは彼を受け入れることができるはずもなく、何としてでも断りたいと



思っている。その際に彼女は「父に頼んでみよう」(149)とベネット氏を頼りにするのである。エリザベスのベネット氏に対する信頼は絶大なものであることは、語り手であるオースティンの「父の拒絶は、決定的な強さをもっていいわたされるだろうし、その態度は、少なくとも、上品な女の気どりとか媚態とかと同一視される心配はありえないであろう」(149)という台詞からも読み取ることができよう。

また、コリンズの申し込みを拒絶するエリザベスを非難するベネット夫人とは反して、ベネット氏は次のようにエリザベスを庇うのである。

今日からあなたは、あなたの両親どちらかと他人にならなければならない。—あなたがコリンズ君と結婚しないとすると、お母さんは二度と会いたくないというし、あなたが結婚するというなら、わたしは二度と会いたくない (152)

上記の父親の発言に、エリザベスは「ほほえまずにはいられなかった」(152)と言っている。以上より、ベネット氏がエリザベスにとっての良き理解者であり、彼女が絶大な信頼を寄せることのできる偉大な父親であることがわかる。このことから、オースティンは *Pride and Prejudice* において、父親を絶対的な存在として描いていることがわかるため、前節で述べた女性社会が中心であるというフェミニズム的解釈には限界があると考えられる。エリザベスが父親を尊敬し、慕っているという点から、本作はパターナリズムの観点から解釈されるべきであろう。

父親がエリザベスに語る結婚観からも、パターナリズムの要素が色濃く読み取れる。エリザベスは、ダーシーとの結婚を決めた後にベネット氏に許可をもらいに行く。誰よりも彼女の良き理解者であるベネット氏は、次のように彼女の結婚について認めると同時に、結婚において何が大切であるかを次のようにエリザベスに告げる。

わたしは承諾をしておいた。(中略)わたしはあなたの気質を知っているよ、リジー。あなたは、ほんとうに夫を尊敬していなければ、そして夫を自分よりすぐれた人と見上げていなければ、幸福にもなれないし、世にりっぱに立ってゆくことができないことを、わたしは知っている。あなたの潑刺とした才知は、不釣り合いな結婚をすると、あなたを最大の危険にさらすことになるだろう。不名誉や不幸をまぬがれることは、まずできないだろう。(下線筆者 492)

下線部分より、ベネット氏は男性を尊敬していないと幸福になることはできないと言い切っていることがわかる。エリザベスがダーシーを尊敬の対象として捉えていることをベネット氏は知っていたため、前もってダーシーに結婚の承諾をしていたのである。本作において、ダーシーはエリザベスよりも「すぐれた人」とであると位置づけることができる。つまり、男性は女性より「すぐれ」ているという構造が成り立っており、強い権力を持った絶対的な父親がそれを良しとしているのである。このことから *Pride and Prejudice* には男性優位の社会が描かれていることは明らかであり、パターナリズムの観点から解釈できる

作品であるということが出来る。

本節を通して述べてきたとおり、オースティンは父親への偉大なる尊敬を明瞭に書き表しており、エリザベスがベネット氏を尊敬の対象として捉えているという点に着眼すると、パターナリズムの構成が浮かび上がることがわかる。さらに、ベネット氏が女性より男性の方が優れていると断言していることから、*Pride and Prejudice* では男性優位の社会が強調されていると捉えることができよう。

第二章では、*Pride and Prejudice* にみられる両面性、すなわちフェミニズム的であるか、パターナリズム的であるかというそれぞれの見方を考察してきた。エリザベスとその周辺の女性のみ注目すれば、作品をフェミニズム的観点から解釈できる一方で、父親とそれを尊敬するエリザベスの関係性に着目した際には、パターナリズム性を持つ小説であると解釈できることがわかった。本作はパターナリズム的観点の強い作品であるとの意見を本章で述べてきたが、あくまでも *Pride and Prejudice* は見方によって二つのアプローチができ、読者のみならず英文学者や研究家をも楽しませてくれる作品であるということを強調したい。主人公エリザベスを通して、読者は本作をフェミニズムとパターナリズムの両方の観点から考察できる。このように、エリザベスが作品を通して体現しているフェミニズムとパターナリズムの「両面性」こそが、*Pride and Prejudice* の面白さを促進させているのであり、人気を博している理由の一つであると考えられる。

### 第三章 エリザベスの変容性

本章では *Pride and Prejudice* における主人公エリザベスが、現代の翻案作品においてどのように改変されてきたかを見ていく。ここでは本作におけるエリザベスの特徴を踏まえ、*Bride and Prejudice*、『真知子』、*Bridget Jones's Diary* の翻案三作品におけるヒロインの描かれ方に着目し、その意義について考察していく。このとき、映像作品と小説とを比較していくことになるが、その違いについては考慮せず、あくまで同じフィクション作品として扱っていくことにする。

#### 第一節 エリザベス・ベネット

*Pride and Prejudice* が改変されるにあたり、主人公の描かれ方に特徴があると考えられる。本作の翻案作品において、そのすべてがエリザベス・ベネットを土台にしているはずであるのに、作品に描かれている主人公はそれぞれ個性的で、かつそれぞれ異なるメッセージ性が含まれている。本節では、まず *Pride and Prejudice* の主人公エリザベスの特徴について考察し、エリザベスがどのように変容されているかの次節に繋げていく。

『あさがきた』や『とと姉ちゃん』、そして 2016 年現在放送中の『べっぴんさん』等、NHK の連続テレビ小説において最近では強い意志を持った女性が主人公となっている。その女性を幼少期から追い、のちに事業を起こし成功していく過程を描いたシリーズの人気は、現代の日本においても衰えを知らない。今となってはこのような「女性サクセスストーリー」に違和感を覚える者はいないだろう。実はこのような「女性サクセスストーリー」は近年のみならず、約二百年も前のジェイン・オースティンの小説においても見受けられる。いつの時代でも「強い意志」を持った女性が活躍するストーリーは注目されてきたのであろう。フェミニズム論者である末森は、本作における主人公エリザベスはいわゆる「女性らしい」とされてきたものよりは、「快活」「知的」「行動的」という面が強調されていると述べており、エリザベスの意志の強さと行動は「女性の自立」の象徴的な一端であるとも主張している (25)。オースティンの他作品である *Northanger Abbey* や *Sense and Sensibility* において、無垢で素直な女性、分別を持つが控え目な女性と多感でお茶目な女性を主人公としていることも考慮すると、*Pride and Prejudice* において自分の意志を身分の高い相手にでもぶつけるような女性を主人公に抜擢したことは大きな意味があるのであろう。オースティン自身も次のように述べている。

エリザベスは今まで印刷されたどの登場人物にも劣らぬ楽しい人物だと考えていることを、告白しなければなりません。それで、エリザベスの嫌いな人をどのようにして許すことができるか、少なくとも私には分かりません。(オースティン 101)

ここからオースティン自身も、全作品の中でエリザベスを最も気に入っていることがわかる。では、そのエリザベスとはどのような人物で、どのような特徴が描かれているのであろうか。末森も述べていた要素の一つである「知的」さが、エリザベスの大きな魅力であろう。英文学者である直野裕子は、エリザベスは周囲の人間を二種類に区分して考えると

述べている。「単純な性格」の人物とそうではない「複雑な性格」の二種類に分けており、その中でも「エリザベスは知的に分析し、客観的に観察する能力を持つ人物であると言える」と直野は結論づけている(66)。このことから、エリザベスは前章で見てきたフェミニズム論とは反して、エリザベスはもともと「知的」さを兼ね備えていたのであることがわかる。エリザベスの「知的」さが物語においてどのように描かれているのかを、同じ家庭内でエリザベスと同じように生活してきた姉のジェインとの比較を通して検証していく。

姉のジェインはまさに従来のヒロインに象徴される繊細さと大人しさ、そして何より誰にも負けない美貌を兼ね備えている。それに対しエリザベスは、姉ほどは美しくないが、知性的で快活でいたずらっぽい気質を持っている。エリザベスを気に入っている父ベネット氏が少しはエリザベスを褒めたらどうだ、と母ベネット夫人に促した際に母は次のように答える。

「そんなことはよしていただきますわ。リジー〔エリザベスの愛称〕は、ちっともほかの娘よりすぐれてはいません。ほんとうにあの娘は、ジェインの半分もきれいじゃないし、リディアの半分も愛想がよくないわ。」(挿入筆者 10)

上記の母ベネット夫人の言葉から、エリザベスはジェインほど高く評価されておらず、むしろ期待すらされてないことが伺える。しかし、上記に述べたベネット夫人は娘の結婚のことしか頭にない能無し人物なので、今度は信頼できるダーシーによる比較を見ていく。直接的に比較をしている場面はないが、彼は舞踏会の夜にジェインを見て「ベネット嬢〔ジェイン〕がきれいなことはたしかだが、あまりに、にこやかすぎる(挿入筆者 25)」と静かに批判するのである。

エリザベスとジェインは、性格の面においても非常に対照的である。ジェインは人に深入りせず、良い面ばかりを見ようという性質があるのに対し、エリザベスは「知的」な視点を持って人物を観察する性質があるため、姉の非を真っ向から指摘する。

「あなたって人は、だれだってお構いなしに好きになることが、多すぎるのじゃなくて？人の欠点なんか見ないんですもの。あなたから見れば、世間の人みな、善良で好感が持てるのだから。いままでに、あなたが人の悪口を言うのを、わたし聞いたことないわ。(中略)見栄も下心もなくとも善意—すべての人の性格のよい点をとって、それをなおいっそうよくして、悪い点については何もいわない—これはあなただけに限ったものなのよ。ですからあなたはあのご姉妹も好きでしょう…」(23)

これは舞踏会にてビングリー家との交流を深めた後の二人の会話である。「あのご姉妹」というのはビングリーの姉妹のことであり、エリザベスは姉ジェインを本気で心配するがゆえに厳しい性格分析を率直に本人に伝え、警戒心を持つよう遠回しに伝えているようである。しかしジェインは一向に聞き入れず、むしろビングリー姉妹を褒めたたえる発言をする。それに対しエリザベスは納得がいかず歯がゆい思いをする。

エリザベスはだまって聞いていたが、納得はゆかなかった。舞踏会でのビングリー姉妹の振る舞いから、人々に親しまれようとするような心は感じられなかった。エリザベスは、姉より観察が鋭敏で、きかぬ強いたちで、人からちやほやされても曲げることを知らぬ判断力の持ち主だったから、あの姉妹を認めようとはついぞ思わなかった。(23)

以上より、ジェインとエリザベスでは、人を観察する鋭さが大きく違うことがわかる。さらにエリザベスにはジェインよりも自分の考えを貫き通そうとする意地が見受けられる。エリザベスは「知的」であるがゆえに、人を観察する能力にも長けていると考えることができる。そして上記の語り手の引用でも述べられているように、エリザベスは「曲げることを知らぬ」性格であることから、強い意志を持つ人物であることがわかる。控え目で大人しいジェインと比較すると、二人の性格の違いは明らかである。ジェインとの対比によって、エリザベスの「知的」かつ「曲げることを知らぬ判断力」が引き立ち、読者はエリザベスに虜になる。また、エリザベスは、当時良しとされていたジェインのようなヒロイン像の常識を覆しているという点においても、読者の心に残る人物となっている。

一方でエリザベスはジェインを尊敬している一面もある。ビングリーがロンドンへ行ってしまい、ジェインが彼のことをあきらめざるを得なくなった時のことである。誰のせいにすることもなく、ただ彼のことを忘れ、平和な心を持つと努めるジェインに対しエリザベスは「あなたは善良にすぎるわ。あなたの優しさと無私の心とはほんとうに天使のものだわ。わたし、あなたに何とっていいかわからない。」(180)と褒めたたえるのである。つまり、ジェインを心から心配するがために強く意見を言うってしまうこともあるが、時には尊敬することも忘れていなかったことを強調しておきたい。ジェインの無垢な心に触れることでエリザベスは持ち前の「知的」で「曲げることを知らぬ判断力」に加え、幾分か「優しさ」を持つようになるのである。

エリザベスは読者だけではなく、ダーシーをも魅了し、最高の条件での結婚を勝ち取る。ダーシーはエリザベスのどこを好きになったのだろうか。ダーシーの手紙によって真実を知り、彼への偏見を改めたエリザベスは、最終的にダーシーのプロポーズを受け入れ、彼と以下のような会話をしている。

「さあ、本気でおっしゃって。私が生意気なのでお好きになったのですか」

「あなたの心が澁刺としているからです。」

「(略) いつもあなたにだけみとめてもらいたいという一心で、話したり、そぶりをしたり、考えたりする女たちにむかむかなさったのですわ。わたしがそういう人たちとまるで変わっているものだから、あなたを刺激して、興味をもたせたのです。」

(下線筆者 496-497)

少々エリザベスが見栄を張っているかのような返答だが、下線部分より、やはりダーシー

は彼女の「知的」で「曲げることを知らぬ」性格に惹かれたと考えることができるだろう。また、この引用部分の前後で、自分には良いところなどないと言い切るエリザベスに対しダーシーは、ジェインの看病に駆け付けた際の彼女を引き合いに出し、そこに優しさがあつたのではないかと説得する。ダーシーはエリザベスの上記で述べたような性格に加え、姉を思う優しさにも惹かれ、結婚するに至ったのである。これらのことより、*Pride and Prejudice* の醍醐味は、「知的」で「曲げることを知らぬ」性格の持ち主だったエリザベスが「優しさ」を身に付けたことで、人間的成長を果たしたところにあるのだろう。

オースティン以前の小説においても、オースティンの他作品においても、エリザベスほど「知的」で「曲げることを知らぬ」が、かつ「優しさ」を持ち合わせているような主人公は見受けられない。そのような意味で、エリザベス・ベネットは当時の社会規範に反する存在であった。オースティンはこのようにしてエリザベスのような強烈な人物を描くことで、ジェインのような控え目で大人しい当時良しとされていた女性像に対して疑問を呈したのではないかと考えることもできる。ゆえに *Pride and Prejudice* の主人公エリザベスは、作中だけではなくその外の世界においてもメッセージ性を持つ、非常に存在意義のある人物だと結論づけることができる。次節では、そのエリザベスが翻案作品で改変されるにあたってどのように描かれ、どのようなメッセージ性を持ち合わすかを考察し、その意義を見出していく。

## 第二節 インド人としてのエリザベス

前節では *Pride and Prejudice* における主人公の特質について考察してきた。本節では *Pride and Prejudice* の翻案作品、*Bride and Prejudice* におけるエリザベス的役割を果たす主人公ラリータに焦点を当てる。そこでラリータがどのように描かれているのかを分析し、翻案作品とその主人公の意義を考察していく。

*Bride and Prejudice* はインド系イギリス人グリンダ・チャード監督 (Gurinder Chadha) によって制作されたインド映画である。本作が *Pride and Prejudice* を下敷きに作られた作品であることは、題名を見れば明らかである。本作は2004年公開のボリウッド<sup>3</sup>映画であるが、十分な興行収入が期待できなかったためか日本では公開されておらず、DVD も販売されていない。しかしチャード監督の他の作品は日本で公開された実績もある。インド系イギリス人の少女がサッカーをする『ベッカムに恋して』(*Bend it Like Beckham* 2002) が彼の代表作として知られている。

チャードは1960年にケニアのナイロビに生まれ、二歳のときにイギリスに移住した。ロンドン西部のインド人街サウスオールで育ち、シーク教徒として生きてきた。その影響を受けた彼はインド系女性の恋愛や結婚を、家族との関わりやインド系でない相手との恋愛に焦点を当てながら描いている。*Bride and Prejudice* もそのうちの一つであり、*Pride and Prejudice* で表現されている階級の壁を、国籍の壁としてうまく表現しているところが特徴である。新井潤美も、「この作品では「イギリス」、「アメリカ」という白人の世界が、

---

<sup>3</sup> ボンベイとハリウッドを組み合わせた造語

彼らにとって「自分たちよりも上の階級」という存在になっている」(174)と述べている。以下は本映画のあらすじである。

インド北部の町アマリツアに暮らすバクシ家には、四人の娘がいて、その中のラリータが主人公である。母は娘たちの結婚相手を見つけることに腐心し、特に海外で成功している裕福な在外インド人と結婚することを懇願している。ラリータたちは友人の結婚パーティーにて、イギリスからやってきたインド系男性で法廷弁護士のバラージとその友人である裕福なアメリカ人ウィリアム・ダーシーと出会う。ダーシーは美しいラリータに目を奪われ惹かれ始める。一方でラリータは、ダーシーがインドの文化や生活習慣について否定的な発言をしたため、彼と口論になり、彼を傲慢なアメリカ人だという印象を持つようになる<sup>4</sup>。ある日海岸で、ラリータはイギリス人ジョニー・ウィカムと出会う。そこでウィカムはダーシーが冷たい人間である等の虚言を連ね、ラリータはそれをすべて鵜呑みにしてしまう。しかしダーシーがラリータに真実を伝えたことで、彼女はダーシーへの偏見を改め、二人は徐々に親密な関係へと発展していく。最終的に二人はインド式の結婚式を盛大に挙げ、物語の終わりを迎える。

以上のあらすじを踏まえて、インドについて否定的な考えを持つダーシーに反論した主人公ラリータに着眼したい。ダーシーはインドでは停電が多く、インターネットの接続が悪くて不便に感じていることを彼女に伝える。彼女は非常に不快な表情を示した上でそもそもインドでのホテルの宿泊費はアメリカのそれと比べ遥かに違うのだから、文句を言うべきではないとの反論をする。ダーシーはさらに、インドの見合い結婚制度を奇妙に感じているとエリザベスに告げる。

“I just find the whole arranged marriage thing a little strange. I don't know how two people can get married that don't know each other. I mean, it's a little backward, don't you think?”

“That's such a cliché. It's different now. It's more like a global dating service. The groom looks pretty happy. Did his parents force him into it? (...) Americans think they've got the answers for everything, including marriage. Pretty arrogant, considering they've got the highest divorce rate in the world.”<sup>5</sup>

上述の引用では、見ず知らずの二人がいきなり結婚することなど理解できないという彼の意見に対し、ラリータは今ではその制度は主流ではなく、見合いでも結婚式に参加している花婿は幸せそうだ、と真っ向から反論する。さらに彼女はアメリカ人の離婚率にまで言及し、彼を含むアメリカ人は非常に傲慢だと非難する。

以上の祖国インドを見下された後のラリータの反応から、彼女がインド人としてのプライドを持っていることが読み取れる。*Pride and Prejudice*のエリザベスのような快活さと

<sup>4</sup> *Pride and Prejudice* で見られるダーシーがエリザベス自身を軽んじる場面は、本映画では描かれていない。

<sup>5</sup> K, Surgei “Bride and Prejudice Script-Dialogue Transcript”

意志の強さに加え、彼女はインドへの祖国愛を持つ主人公として描かれている。あえてイギリス英語における標準発音である RP に矯正することなく、インドなまりの英語で堂々とアメリカ人やイギリス人と会話することも、彼女のインド人としてのアイデンティティーの表れなのであろう。

また、ラリータを通してインドの現状を語らせることには、観客にインドへの凝り固まった偏見から脱却してほしいという監督チャーダの意図があったのではないか。見合い結婚についてラリータとダーシーが会話する場面があったが、その中でラリータは今の状況は昔とは違い“global dating style”だと強調する。つまり、見合い結婚が主であった伝統が変わりつつあることをチャーダは伝えたかったのであろう。実際に社会学者の樋口里華は、インドの現状に関して、近年では配偶者選択の多様性が受け入れられるようになってきていて、特に都市部においては、家族のあり方について本人の意向が尊重されることが多くなり、カーストよりもパーソナリティや価値観、階層を重視して配偶者を選択する傾向がみられるようになってきたと分析している(46)。樋口の主張から、インドの結婚状況が今昔において変化していることがわかる。ラリータは観客にインド人のアイデンティティーとインドの実情を提示してくれる使者でもあるのだ。

当初インド文化に違和感を抱いていたダーシーだが、物語の結末ではラリータとインド式の結婚式を挙げ、インド人と共にインドの伝統楽器とみられる太鼓を満面の笑みで演奏する。これはまさにダーシーがラリータのおかげでインド文化への「偏見」から解放され、その文化を受け入れることに成功した表れではないだろうか。これらを踏まえ、*Bride and Prejudice* は現代の社会問題を取り入れた、原作にはない新しい価値観を持つ作品であるといえる。エリザベスに置き換えられたインド人ラリータは、インドの実情をありのまま観客に周知してくれる役割を果たしている。ラリータはエリザベスのような「強い意志」を持ち、自国の文化や社会の現状をそのまま語るという点で、価値のある人物であるといえることができるであろう。

### 第三節 社会主義者としてのエリザベス

前節では *Pride and Prejudice* の翻案作品の一つであるインド映画 *Bride and Prejudice* を取り上げ、その主人公ラリータの役割を考察した。本節では日本における *Pride and Prejudice* の翻案小説『真知子』を取り上げる。『真知子』では、翻案作品の中でも珍しいことに、エリザベスに相当する主人公が社会主義者として描かれている。本節では主人公真知子が日本の社会主義者としてどのように描かれているか、そして真知子がどのような働きをしているかを、物語の流れに沿いながら考察する。特に *Pride and Prejudice* と『真知子』の二作を比較し、類似点と相違点に焦点を当てながら、主人公真知子の役割を調査していく。

オースティンの *Pride and Prejudice* は日本においても広く読まれ、高く評価されてきた。日本を代表する作家夏目漱石も *Pride and Prejudice* の冒頭部を取り上げ、オースティンの作風を高く評価していることは有名な話である。オースティン協会会長の海老根宏は『ジェイン・オースティンを学ぶ人のために』の序章にて、夏目漱石は特にオースティンの描



く夫婦の描写に感心したとし、オースティンが夏目漱石に与えた影響は大きかったと言及している (5)。その夏目漱石を尊敬し長年師事してきたのが、英文学者兼小説家、翻訳家、さらには能楽の研究家として成功を収めた野上豊一郎であった。彼は 1926 年にオースティンの *Pride and Prejudice* を『高慢と偏見』として翻訳している。のちに妻となる小説家の野上弥生子は、夫の影響を受け *Pride and Prejudice* の形を変えて『真知子』を記した。『真知子』は 1928 年から 1930 年に渡り雑誌『改造』に掲載された作品である。英文学者の榎本の論文によると、弥生子は夫を介して夏目漱石から小説の指導を受けていたために *Pride and Prejudice* を知り、そこで初めて彼女とオースティンの接点が生まれたとされている (35)。弥生子は初めて本作を読んだ際に強い衝撃を受けたことを日記に次のように記している。

小説は『ジェーン・エア』をまず手始めに、つづいて『プライド・エンド・プレジューディス』を読んだ。その時の強い感銘はいまだに忘れない。それは私には一種の開眼であったとともに、また深い失望であった。オースティンは 23 でそれを書いた。ちょうど私も同い年くらいであったから、自分のほんの習作のような貧しい短編に思い比べて、その素晴らしさに打たれるだけ自信喪失に陥ったのである。しかしそれ以降『プライド・エンド・プレジューディス』は私の愛読書となった。(362)

以上の引用より、オースティンに感銘を受けたことがきっかけとなり、弥生子は *Pride and Prejudice* を土台にした作品『真知子』を描くに至ったのであろうということが想像できる。榎本は、*Pride and Prejudice* と『真知子』は、その作品の筋立や人物造形だけではなく、主人公が結婚問題を通して自己成長する点も類似していると述べている (35)。これらを踏まえ、『真知子』と主人公真知子を考察していく。まず物語は次のように始まる。

結婚問題について、母がこのごろ急にあせり出したのを、真知子は見遁さなかった。父の死後、殊にふたりの姉たちが片づいてからは、未亡人らしく小石川の古い家に引っ込んでいた母が、口実をつくっては彼女をひとなかへ連れ出そうとしたり、自分でも気軽に付きあい先を訪ねたりするのは、そのためであった。(5)

「結婚にあせる母」で始まる上述の冒頭部分の引用より、『真知子』と *Pride and Prejudice* が類似していることがわかる。主人公である真知子は、二十四歳で大学の聴講生として社会学を学ぶ「才能ある、独立の考えを持った美しい娘」(5) である。榎本は本作のエリザベスと真知子の共通点を「働く必要のない有閑階級に属しているが、経済的にはあまり余裕のない、結婚適齢期の若い女性」(37) であると主張している。社交の会の度に着物を着させられ、形式的な挨拶を交わすことを強られる真知子は、自分の属する上流階級を嫌い、社会主義を支持するようになるのである。

真知子はある日、河井財閥の御曹司でケンブリッジ大学出身の考古学者河井輝彦に出会う。この河井が『真知子』におけるダーシーであり、真知子が偏見を抱く相手である。エ

リザベスがダーシーの第一印象に不快感をおぼえたように、真知子も「あんな人は至る所でちやほやされつけているから、見え透いたお世辞を言われても多分無感覚なのだ」(24)と彼に反感を抱く。榎本は、真知子の反感はエリザベスとは違い、「階級」そのものに向けられていると述べている(41)。実際、真知子が河井についてのちに「貴族や金持ちによくある、自分の興味あること以外には決して留意をしようとしない、また地位と金の力によってその我儘を通し慣れた、無意識なエゴイストの一人」(113)であると考えていることから、真知子による上流階級批判は明らかである。

またエリザベスがウィカムに惹かれたのと同様に、真知子は貧農出身の革命家である関に好意を抱く。彼女は関の社会主義への強い思いに心を惹かれ、二人は結婚を約束する。このように『真知子』で描かれている主人公を取り巻く社会主義を背景とした運動や恋愛の細やかな描写は、当時の日本の状況をそのまま表しているのであろう。文芸評論家である瀬沼茂樹は『真知子』の巻末部分の解説にて、『真知子』が世に出された1920年代の日本について「社会運動、学生運動はいつそう激しくなり、当局から抑圧されればされるほど、むしろそのために、逆にマルクス思想に、悲愴な正義の情熱をもやすことが、若い学徒の良心を秤量する尺度とも考えられるような一時期をもった」(352)と明言している。

真知子は上流階級と貧農との階級の差による不平等性を解決するべく、「一切の不公平を取り除く組織の実現」(67)を謳う関の支持する思想に共感し、運動に参加する。このことから、真知子は社会そのものに反発する強い女性であることがうかがえる。真知子の「革命家関との恋に賭け、自らも革命運動に参加することで、自己の属する階級から脱出し人間的成長を遂げようとする(44)」姿勢は、打算的な結婚を反対するも、父やダーシーに保護された環境下に留まり続けるエリザベスとは異なる点であると榎本は述べている。(44) また英文学者の久守和子は“Unlike Austen, however, she makes her standpoint clear vis-à-vis some of the social, political and gender problems of the period.”(3)と述べ、真知子は社会主義者としてその立ち位置を明確にしていると指摘している。真知子は若い女性の社会主義者の象徴として描かれているのである。

物語に戻ると、実は関は真知子の友人米子とすでに婚約しており、子供まで身ごもらせていたのである。怒った真知子が彼のもとを訪ねた時に初めて、関は米子のお腹の中に自分の子が宿っていることを知るのである。彼は、「子供を持ってどうするんです。一誰が育てるんです。誰が見てやるんです。一僕にはそんな金もなけりゃ、暇もない。大庭〔米子〕だって同じ筈だ。」(挿入筆者 299)と米子を批判する。社会主義の思想をもつ若い男性がこのような考えを持つことは常識の範囲内だったため、関の発言を真知子は理解できない訳ではなかった。しかし、真知子はこのエゴイズムの思想に徐々に疑問を抱き始めるようになる。

女がひとりで母親になれるとお思いになるんですか。あんたは望みもしなかったことを、米子さんだけで望んだのだと仰る積りなんですか。あんたはそれほど卑怯な方なんですか。(300)

このように真知子は関に反論するも、彼の態度は依然として変わらない。さらに彼女は「どんな見事な組織で未来の社会が出来上ろうとも、こんな思いで苦しむものが一人でも残っている間は（中略）決して完全な世界ではない筈です。」(301)と社会主義的な考えそのものを非難し、一瞬でも関のことを愛していた自分の過去を悔やむ。真知子はこのとき、社会主義の思想が必ずしも正しいとは限らないことを知り、自分の考えを改めるのである。この場面は、本作においてウィカムの虚偽の発言を鵜呑みにしたエリザベスが真実を知った場面と相似する。

*Pride and Prejudice*において自分の考えを改めたエリザベスは、ダーシーの保護のもと精神的成長を遂げていく。『真知子』においてそのダーシーに値するのが河井である。真知子は関との結婚を決意する直前に河井から求婚されるものの、上流階級からの脱却を求め彼女がきっぱり断るのである。それだけではなく、真知子は河井が勤しむ考古学という学問を「土の下」と表現し、その意義すら非難する。

私はただ土の下と土の上のことを話しているだけですわ（中略）二つを比較した場合には、その人の傾向でいくらか違った考えをするものがあったとしても、一般には誰だって、地の底の過去の世界の間がどんな生活をしていたかより、地上の現在の社会をどうして住みやすくするかの方に、関心を持つのは当然だと云うのですわ（112-113）

引用から、考古学は所詮「土の下」の学問であり過去の人間の研究でしかない、真知子は考古学を否定的に捉えていることが明らかに読み取れる。そのように非難する真知子に対し、河井は彼女の意見をひたすら冷静に聞き、「一すんだのかな」(114)と最後まで穏やかにその主張を否定することなく一意見だとして受け入れるのである。エリザベスを見守るその河井の態度は、まさに前章で言及した「理性的な観察者」であるベネット氏を彷彿させるだろう。

自らの過ちを改めた後の河井との再会の場にて、真知子の河井に対する態度は大きく変化する。考古学について語る河井を見た真知子は、「常の河井にはなかった活き活きしきで生気づけられていた。真知子は誰か別人を発見したような珍しきで、快活な唇の内側に光る歯を眺めた。」(315)とあるように、彼のことを実は愛していたのかもしれないと思い始める。さらに「土の下」と小馬鹿にしていた学問については、「そんな生意気のこと、今では思っはけませんわ。どんな仕事だって、高い目的に結びついてさえいけば、値打に足りないことを知ったのです。漸くこの頃になって」(316)と、河井の学問を認めるまでになる。真知子は「上流階級の河井」としてしか彼を見ていなかった自分の考えを改め、そして河井の研究している考古学についても受け入れ、彼との結婚を決めることとなる。これまで述べてきたような「互いにすれ違いつつも最終的には人間的な深まりに成功し、認め合いながら結婚へと向かう展開」が、二作の共通点なのである。

これまでストーリーを追いながら *Pride and Prejudice* と『真知子』の比較を行ってきた。滑稽な母や穏やかな紳士像、そして円満な結婚が描かれているという点において二作は類

似しているが、主人公の描かれ方に関しては大きく異なっているといえる。先にも述べたように、真知子は「自分の所属する階級に不満を持つ社会主義者」であり、女性の権利や学問の意義について鋭い視点で捉え、誰に対しても恐れずに意見できる勇気を持ち合わせている。『真知子』について瀬沼が「結婚と思想との問題をとりあげ、ひとりの知識人として正面から、それを考えようとした本格小説である」(352)と指摘するほど、主人公真知子の社会主義的な思想は大きな意味を持つのである。一方で *Pride and Prejudice* の主人公エリザベスは自分の属する階級への不満を見せることもなければ、社会的な発言をすることもない。ここに二作の大きな違いがあることがわかるだろう。野上弥生子は真知子を描くことで行き過ぎた当時の社会主義思想を批判したかったのではないか。弥生子は主人公真知子を通して、社会主義者は最終的に裏切られる運命にあるということを強調して描いているのである。榎本も同様に、『真知子』を通して弥生子は、ただ若いという勢いだけで階級の縛りを脱した社会主義的思想を抱く女性たちに対して自分の誤りを気づかせようとした作品であると論じている(49)。

本節を通して、主人公真知子について考察し、真知子は当時の社会主義者を抑制する役割を兼ね備える人物であることを示してきた。弥生子は、真知子と思想を結びつけて描くことで、当時急進的な思想を抱いていた若者たちにある種の警告を示したのではないだろうか。これまで本節で述べてきたように、主人公に社会的政治的意見を語らせれば、結婚問題だけではなく社会問題についても読者は目を向けざるを得ないのだろう。エリザベスに相当する主人公に、社会主義というテーマを植えつけることによって作品が価値を持つ。よって主人公真知子は、『真知子』の中で作者が一番伝えたいメッセージを読者に知らせる重要な役割を担っているのである。次節では、イギリスを舞台にした現代の翻案作品 *Bridget Jones's Diary* について考察する。

#### 第四節 現代人としてのエリザベス

これまで *Pride and Prejudice* の翻案作品の主人公を中心に考察してきた。*Bride and Prejudice* の主人公であるラリータはインドの文化や社会の実態を明らかにし、『真知子』の主人公である真知子は戦後の日本の急進的な思想を読者に警告してきた。本節では、*Bridget Jones's Diary* の主人公ブリジットに焦点を当てる。女性の権利や自由が認められはじめた 2000 年代イギリスを舞台にした本作品の中で、エリザベスに相当するブリジットはどのように描かれているのだろうか。ブリジットはときには皮肉たっぷりにときには感傷的になりながらも、「ありのままの自分」をさらけ出し、飾ることなく日々を懸命に生きる。その主人公の姿に読者は自分自身を重ね合わせ、共感するのである。個性を大切にすこの主人公ブリジットが *Bridget Jones's Diary* の魅力の一つになっている。本節では、ブリジットが作品において果たす役割は何であるか、*Pride and Prejudice* のエリザベスがどのように描きかえられているかについて考察する。

*Bridget Jones's Diary* の著者ヘレン・フィールディングは 1958 年にイギリスのヨークシャーに生まれた。オックスフォード大学を卒業後、BBC に入社し番組制作に携わる。実際に作中にて主人公ブリジットがテレビ業界で働く場面があることから、彼女の BBC での経

験は非常に大きな意味を持っていたと考えられる。*Bridget Jones's Diary*は1996年に出版され、続編 *Bridget Jones's : The Edge of Reason*は1999年に出版された。この二作品はそれぞれ2001年と2004年に映画化され、世界中で大きな反響をよぶものとなった。コリン・ファースとヒュー・グラントのイギリス二大俳優が出演したこともあり、非常に注目度の高い作品であった。第一章でも述べたが、特にコリン・ファースに関しては、1995年にBBCによってドラマ化された *Pride and Prejudice*でもダーシーを演じていたため、話題になったのである。さらに2016年には三作目となる *Bridget Jones's Baby*も公開され、その10年越しの映画化に「帰ってきたブリジット！」と多くのファンを興奮させた。

*Bridget Jones's Diary*は *Pride and Prejudice*を土台にした翻案作品である。マーク・ダーシーという登場人物はまさにダーシーを想起させ、三十代にもなって独り身のブリジットを心配する母はベネット夫人そのものである。冒頭の母の発言とそれに対するブリジットの反論はベネット夫人とエリザベスのやりとりを思い出させる。

ダーリン、あなた、マーク・ダーシーのこと憶えてる？（中略）彼、五本の指に数えられる超一流の弁護士さんなのよ。離婚したんですって。エレインの話じゃ、仕事仕事の毎日で、すごく淋しい生活なんですってよ。彼もウナの〈新年ターキー・カレー・パーティ〉に来るかもしれないのよ、じつをいうと（16）

この母親の発言に対しブリジットは「そんな回りくどい言い方しないで、どうしてもっとはっきりいわないんだろ（中略）彼、すごいお金持ちなのよって」と心の中で皮肉に思っているのである。*Pride and Prejudice*におけるエリザベスも同様に、「母がまた自己をさらけ出すのではないかと、気をもんだ」（63）り、「〔母の発言に対して〕このことをどう理解していいかわからなかった」（挿入筆者 430）りと、母親を軽視している。このほかにも主人公が冒頭にてダーシーに偏見を持つ点、ウィカムに惹かれる点、最終的にはダーシーとの結婚でおさまる点等、*Bridget Jones's Diary*には *Pride and Prejudice*のストーリーとの類似点が数多く見受けられるため、翻案作品であることは明確である。実際に著者ヘレン・フィールディング自身も、映画DVDの映像特典メイキングドキュメンタリーの中で、「オースティンの『高慢と偏見』を参考に書いた。何世紀も市場調査を重ねた優れた物語だわ。（中略）作者は故人だから気兼ねなく盗用できた」と語っている。以上を踏まえ、主人公ブリジットの描かれ方を、一部映画版にも言及しつつも主に原作版に重きを置き、*Pride and Prejudice*と比較しながら考察していく。

主人公ブリジット・ジョーンズは三十二歳の独身女性で出版社に勤務している。ブリジットは、新年のパーティーにてバツイチの優秀弁護士マーク・ダーシーと出会うも、彼の服装のセンスの低さや会話力のなさに幻滅し、今後も男の人との恵まれた出会いがなく一生独身になるのではないかと不安になる。そこで彼女は、新年の決意として自分を磨くことを決めるのである。職場の上司ダニエルは、ブリジットから好意を持たれていることに気づいた途端に彼女に言い寄り始める。めでたくブリジットとダニエルは恋人同士になるも、実はダニエルは浮気をしていたのである。ブリジットは傷心の身から彼のいる出版

社を辞め、テレビ局に再就職する。そこで失敗を繰り返しながらも一生懸命取り組んでいるブリジットにダーシーは再会を果たすのである。ダーシーはブリジットの独占取材に協力し彼女の名声を向上させることに貢献したり、ブリジットの母の浮気相手を説得し彼女を家に帰らせ一家の団欒の再来に力を尽くしたりと、彼女を事あるごとに窮地から救い出す。その一連の出来事を経て、彼女はダーシーの優しさに惚れこみ、彼に対するイメージを改め直しめでたく二人は結ばれるのである。以上が *Bridget Jones's Diary* の原作版のあらすじである。

一方でこの原作版に *Pride and Prejudice* の要素をより多く盛り込んでいるのが映画版である。一つ目に、ブリジットとダーシーの出会いの場である。映画版ではダーシーが密かにブリジットの悪口を言っているのを、当の本人ブリジットが耳にしまうという描写がなされている。これはまさに *Pride and Prejudice* の舞踏会でのシーンに相当しており、*Bridget Jones's Diary* の小説版には見られない。二つ目に、小説と映画では *Pride and Prejudice* のウィカムに相当するダニエルの描かれ方が異なっている。映画版ではウィカムがそうしたように、ダニエルがダーシーについての虚偽の話をブリジットにする場面があるが小説にはその描写は見られない。新井の言葉を借りると、小説のダニエルは単に「女性関係に関してだらしなく」「現代の典型的な」「軽薄な独身男性」(47)として描かれているだけである。このような点で、映画版には小説版より *Pride and Prejudice* の要素が盛り込まれていることがわかる。また、映画版での二人が愛を誓うラストシーンにて、パンツとコートのみをまとったブリジットが夢中でダーシーを追いかけるカットがあるが、もちろんこのような視覚的に視聴者を笑わせるような場面は小説には描かれていない。小説ではブリジットの視点によって描かれる「自信」または「皮肉」や「不満」が読者を楽しませる最大の要素となっている。また、そのようなブリジットに、読者が自分自身を投影できるという点においても小説の人気に火がついた理由の一つであろう。

次にブリジットの特徴について考察していく。まず、ブリジットは「自信」を持った女性である。彼女には三十代で独身でありながらも、結婚し家庭に入っている者より毎日を楽しく過ごしているという「自信」がある。なぜなら彼女にはキャリアという強みがあるからであろう。ブリジットの友人で二人の子持ちであるマグダは、一旦子供ができて仕事を辞めると急激に立場が弱くなったと、ブリジットに嘆いている。夫が浮気することへの不安を常に抱えて生活しているマグダを目の当たりにしたブリジットは、マグダに同情するものの、自分のキャリアを誇り高く思っているため、マグダのように打ちひしがれることはない。ブリジットのキャリアに対する考え方は、母との会話の中で次のように語られている。

「キャリアが欲しい」と母がいった。とたんに、わたしのなかの意地悪い部分が刺激され、胸のなかでにんまりとした。だって、わたしにはキャリアがあるから。っていうか—とにかく、仕事があるから。わたしはキリギリスはキリギリスでも、草だか蠅だか(キリギリスが冬に備えてためこむもの)をたんまりと蓄えたキリギリスだ。たとえボーイフレンドはいなくても (94)

年金や家や恋の相手など全てを持ち合わせていても「夏じゅう歌ばかりうたってすごしたキリギリスみたいな気がする(93)」と何も蓄えていないような気になっている母に対して、ブリジットはキャリアの優位性に酔いしれるのである。結婚しなくとも三十代の女性が一人で生きていける時代になったことがここから読み取れる。キャリアを持っている主人公が描かれているか否かが本小説と *Pride and Prejudice* の大きな違いであろう。もちろんエリザベスは自分より上の位の人に物申す「自信」は人よりも持ち合わせているが、これといったキャリアは持たず、特技もほとんどないに等しい。しかしブリジットは出版社としてのキャリアを持ち合わせており、その経験を活かしてテレビ業界でも活躍するのである。ブリジットはまさに現代の女性の象徴であり、理想にもなっているのである。

次にブリジットによる皮肉や不満について考察する。彼女は母国を愛しつつも特定のイギリス文化や社会をユーモアたっぷりに批判する。例えば欧米に根付くクリスマス期間中のプレゼントを交換する文化について次のように非難する。

やっぱり、国じゅうの人間が、陰悪な気分で六週間ものあいだ必死に駆けずり回り、どう考えても無意味な「他人の趣味評価試験」の準備をして、あげくのはてに国じゅうの人間がその試験に落第し、その副産物たる悪趣味もいとこの、別に欲しいとも思わない品物に埋まって動きがとれなくなるなんて、おかしい。(下線筆者 383)

上述の引用より、ブリジットはクリスマス的一大イベントであるプレゼント交換を「他人の趣味評価試験」とユーモアたっぷりに批判している様子がわかる。そして最終的にはブリジット自身が「買い込んだ品物を身内や友人に分配し、分配された者がそれをラッピングして、もともと買った者にプレゼントすべし、という法律でもつくればいいじゃない」(383-384)と提案するのである。このような文化だけではなく、以下のようにイギリス社会への皮肉も見られる。

ゆうべはひどい目にあつた。アルスター統一会議派(英国にとどまることを主張する北アイルランドの政党)とアイルランド民主労働党の違いと、北アイルランドの宗教・政治指導者で、アイルランド共和国との統合に反対する運動を展開していたイアン・ペイズリーが、どちらにかかわっていたのかがわからずパニックになる夢を見て、夜中に何度も汗びっしょりになって目が覚めた(258)

上に述べているアイルランド民主労働党は、主に北アイルランドはアイルランド共和国に属すると主張する団体であり、アルスター統一会議派とは対立関係にある。「イギリス」というのは単なる通称で、正式名称を「グレートブリテン及び北アイルランド連合王国」といい、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの四つの地域から成り立つ。そのため、引用からわかるようにイギリスは絶えず民族同士の対立が起こっている複雑な国であるということができるのである。ブリジットはそのようなイギリスの内情

を客観的に捉え、「パニック」になるほど複雑であると考えている。彼女はまた、ヨーロッパ戦勝記念日について次のように批判する。

こんな日に、人生への積極的アプローチを提言したり、自分たちにはなんの関係もないことにこっそり便乗しようとしたりするのは、熱意のはきちがえだし、間違っているような気がする。だって、そもそもわたしは、戦争が終わった日には、たぶんまだ卵子でさえなかったんだから。(159)

以上の引用より、ブリジットは戦勝記念日で盛り上がる国民を「熱意のはきちがえ」と皮肉り、自分とその記念日は一切関係ないというスタンスを貫き通していることがわかる。このようにブリジットは、イギリスの文化のみならず政治的問題や国の記念日すらも不満に感じ、ユーモアたっぷりに批判する。ブリジットの上記のような発言は、現代社会に不満を抱える読者たちにとって、痛快であり共感できるものなのである。

読者がブリジットに感情移入しやすい要因の一つとして、小説の構成も挙げられる。*Bridget Jones's Diary*はブリジットが日々日記帳に綴る語りで物語が語られる小説で、その日の日記の書き出しにはほぼ毎回、ブリジット自身の体重や摂取したアルコール量と煙草の量等が次のように明記される。

体重→58.8キロ(でも、クリスマスのあとだから)、アルコール→一四単位(ただし、二日分を効率的にとったことになる。パーティーの後半の四時間はきょうに入っていたから)、煙草→二二本、カロリー→五四二四(8)

これは冒頭の1月1日曜日の日記の一部である。ブリジットはアルコールや煙草を「単位」として毎回ほぼ欠かすことなく書き綴るのである。このように日記調で語られるがゆえに、読者はブリジットのありのままの姿を垣間見ることができ、彼女に同調し共感することができると思うことができよう。

また、ブリジットの価値観は階級などに影響を受けることはなく、読者のそれと共有できるものである。ブリジットは人の外見よりも中身を重視する人間である。一方で、階級や地位が大きな影響力を持つ時代に生きるエリザベスにとって、友人や結婚相手を中身のみで判断することは困難であろう。ブリジットの「この国の文化って、外見だとか年齢だとか社会的地位だとかにとらわれすぎている。」(110)という発言から、ブリジットはエリザベスとは異なり、現代的な価値観を兼ね備えた人物であることが明らかである。*Bridget Jones's Diary*の映画監督であるシャロン・マグアイアも特典映像の中で「人は外見の美しさにとらわれがち」と述べている。マグアイアは、ブリジットは外見だけを気にする軽率な女性ではないため「脚光を浴びにくいタイプ」であるが、彼女は「ゆかいで温かくて親切で正直」と称している。失敗は誰にでもあることだが、それでもあきらめず自分を信じて成功に向かう主人公の姿が現代の読者の共感を呼ぶのであろう。例えばダニエルに裏切られ職を変えざるを得なくなっても、ブリジットは次のように思考を整理す



るのである。

わたしはいま、なにごとにつけても大いに積極的になろうと決心している。生き方を変えよう。まず、時事問題に精通する。つぎに、完全に禁煙する。そしてもうひとつ、大人の男性とまともな人間関係を築く（下線筆者 246）

以上からわかるように、ブリジットは過去を反省しつつもすでに未来を見据えて努力しようとするのであり、その彼女の姿を読者は応援せざるを得なくなるのである。

本節を通して述べてきたように、*Bridget Jones's Diary*は*Pride and Prejudice*の翻案作品であり、主人公ブリジットは「現代を生きるエリザベス」である。恋愛に関する道徳観や知性や快活さは二作品の主人公に共通している。しかしブリジットはエリザベスとは違い、イギリス社会のその政治的複雑性や俗物根性が垣間見える文化について痛烈に批判する。この批判が読者にとっては痛快であり、共感できるものになっている。また、ブリジットは「キャリア」を持っているため、結婚をしなくても独りで生きていける女性として描かれている点に読者は理想を抱き、自分自身を投影することができる。さらに、恋愛観をはじめとした彼女のライフスタイルも、日記調で描かれていることから読者はブリジットに共感することができる。*Bridget Jones's Diary*においてブリジットは、読者の理想であると同時に、自分自身を重ねあわすことができる存在として描かれている。ゆえにブリジットは、現代の読者を励ましてくれるという点で存在意義のある人物であろう。

第三章を通して、翻案作品内のエリザベスに相当するそれぞれの主人公について考察してきた。*Bride and Prejudice*のラリータはインドの文化や社会の実情を読者に示し、『真知子』の主人公真知子は、社会主義の急進的な思想を遠回しに抑制する役割を果たしていることがわかった。そして*Bridget Jones's Diary*のブリジットは現代を生きる女性の等身大であり、時には痛快な気分をさせてくれたり、時には励ましてくれたり、と価値のある存在であることが明らかになった。三作品ともエリザベスを土台に主人公を描いているという点で共通しているものの、翻案作品それぞれの主人公にそれぞれ異なるメッセージ性が込められていて、彼女たちが作中において果たす役割は相違している。このことから、*Pride and Prejudice*のエリザベスはいかようにも解釈されることができる多様な変容性を持つ人物であるということができよう。ゆえに*Pride and Prejudice*が形を変え、翻案作品として現代でも読まれ続けているのは、主人公エリザベスがいかに変容されうることができる性質を持っているからであると結論付けることができる。

## 終章

本論ではジェイン・オースティンの *Pride and Prejudice* が、出版から二世紀以上経った現代でも愛され続けている理由を、主人公エリザベスに着目しながら検証してきた。第一章では、現代における *Pride and Prejudice* の立場を明らかにするため、映像作品を通して本作が大衆文化に受け入れられるようになった経緯を見てきた。特に 2005 年に公開された映画ではロマンチックなエンディングをアメリカ版として設け、観客の期待に沿った作品にリメイクしている。現代の観客でも理解しやすい構造として改変していることから、*Pride and Prejudice* がより大衆に近い存在になってきたことがわかる。また、ジェイナイトに広がった博物館やツアー等の文化としての *Pride and Prejudice* を紹介し、作品が現代に親しみやすい存在としての地位を確立していることも証明してきた。文学の面においても、作品を帝国主義やスポーツ文化と結びつけるという、現代的な解釈がされていることも紹介した。ゆえに *Pride and Prejudice* は様々な形で現代の我々の文化の中に生き続け、文学界においても議論され続けている作品であることを証明した。第二章では、*Pride and Prejudice* を、主人公エリザベスを通して、フェミニズムとパターンリズムの両方の解釈から読み解くことができると証明した。本論ではパターンリズム的要素の強い作品であるという結論に至ったが、重要なのは主人公がこのような両面性を持ち合わせているからこそ、長年に渡って学者や研究者たちによって様々な論争がされ続けていることであると強調した。第三章では、翻案作品によってそれぞれ異なるメッセージ性を持つ主人公エリザベスの描かれ方を取り上げた。翻案作品の土台となる *Pride and Prejudice* におけるエリザベスは、「知的さ」に恵まれた女性であり、当時の文学界の常識を覆すようなヒロインとして描かれている。このようにオースティンが強烈な主人公エリザベスを描いたことで、姉のジェインのように控え目で大人しい女性を良しとしていた当時の考え方に疑問を呈しているというメッセージ性も読み取れる。翻案作品の一つであるグリнда・チャータ監督作品の *Bride and Prejudice* では、インド人ラリータはインドの社会問題や文化について鑑賞者に紹介してくれる役割として描かれている。野上弥生子の『真知子』では、主人公真知子が若き女性社会主義者として表現されている。さらにヘレン・フィールディングの *Bridget Jones's Diary* におけるブリジットは、読者の理想であると同時に、彼女の批判や皮肉に共感できる読者が自身を重ねることのできる存在として描かれていて、現代の働く女性たちに勇気を与えている。このようにそれぞれ作品を通して強調したいメッセージを、変容された主人公エリザベスの口を借りて、見事に鑑賞者に伝えているのである。このようにして主人公エリザベスに様々な価値観を付加できるため、*Pride and Prejudice* の翻案作品は人気を博している。よって *Pride and Prejudice* が後世においてもその存在感を弱めることはないであろうと考えることができる。

これまで記述してきたとおり、*Pride and Prejudice* は文化の面においてジェイナイトを楽しませ続け、学問の世界においても様々な解釈がされ続けていることがわかった。その理由として、主人公エリザベスの変容性が挙げられた。エリザベスを通して、読者は *Pride and Prejudice* をフェミニズムとパターンリズムの両方の立場から解釈することができる。また、翻案作品においては、そのすべてがエリザベスを土台とした主人公を描いているは

ずであるが、その主人公の描かれ方が時代や国によってそれぞれ異なっており、持っているメッセージ性に特徴が見られた。つまり、エリザベスはいかようにも変容できる性質を持っているということが明らかとなった。よって、*Pride and Prejudice* が現代においても読み継がれている理由は、エリザベスの変容性にあるということが出来る。エリザベスを通して、読者は *Pride and Prejudice* をフェミニズム・パターナリズムの両者の視点から好きなように解釈できると同時に、様々な翻案作品を楽しむことができるのであろう。主人公エリザベスの変容性こそが、現代まで *Pride and Prejudice* が読み継がれてきた要因なのである。本論文では、一般的に恋愛や結婚を軸として議論されることの多い *Pride and Prejudice* を、主人公エリザベスの変容性に焦点を当てて論じてきたという点で意義があるといえるだろう。

## 参考引用文献

- Austen, Jane. *Pride and Prejudice*. England : Penguin Classics
- Cartmell, Deborah. “*Pride and Prejudice* and the adaption genre” *Journal of Adaption in Film & Performance*, V.3, No.3 (2010)
- Feancus, Marilyn. “Austen Therapy: *Pride and Prejudice* and Popular Culture.” A publication of the JANE AUSTEN SOCIETY OF NORTH AMERICA, V.30, No2, 2010.
- Fielding, Helen. *Bridget Jones’s Diary*. United States of America : A PENGUIN BOOKS, 1996.
- Hisamori, Kazuko. “Elizabeth Bennet Turns Socialist: Nogami Yaeko’s *Machiko*” A publication of the JANE AUSTEN SOCIETY OF NORTH AMERICA, V.30, No.2, 2010.
- K, Surgei. “Bride and Prejudice Script-Dialogue Transcript.” 10 Oct. 2016  
<[http://www.script-o-rama.com/movie\\_scripts/b/bride-and-prejudice-script-transcript.html](http://www.script-o-rama.com/movie_scripts/b/bride-and-prejudice-script-transcript.html)>
- Kasius, Jennifer. *Jane Austen Her Complete Novels in One Sitting*. London : A Running Press, 2012.
- Salber, Cecilia. “Bridget Jones and Marc Darcy: Art Imitating Art...Imitating Art.” A publication of the JANE AUSTEN SOCIETY OF NORTH AMERICA, V.22, No.1 (2001)
- Stovel, Nora. “Will You Dance? Film Adaptions of *Pride and Prejudice*.” A publication of the JANE AUSTEN SOCIETY OF NORTH AMERICA, V.34, No.1, 2013.>
- Warren, Renee. “Jane Austen Biography.” Jane Austen. 2016. 23 Aug 2016  
<<http://www.janeausten.org/jane-austen-biography.asp>>
- “BBC Home *Pride and Prejudice*.” BBC Homepage Online. 2014. 29 December 2016  
<<http://www.bbc.co.uk/drama/prideandprejudice/>>
- 新井潤美 『自負と偏見のイギリス文化 J・オースティンの世界』 岩波新書, 2008年.
- \_\_\_\_\_. 『不機嫌なメアリー・ポピンズ イギリス小説と映画から読む「階級」』 平凡社新書, 2005年.
- 新井英夫 『「高慢と偏見」にみるパターンリズム : ベネット氏からダーシーに受け継がれるエリザベスへの教育』 『松山大学論集』 26号, 2014年. 117-142
- E.W.サイード、大橋洋一訳 『文化と帝国主義1』 みすず書房, 1998年.
- 岩上はる子 「ジェイン・オースティンの受容 : 明治期から昭和初期にかけて」 『滋賀大学教育学部紀要Ⅱ』 59号, 2009年. 1-8
- 稲垣正治 『イギリス文学のなかにスポーツ文化を読む』 叢文社, 2006年.
- 内田能嗣・塩谷清人編 『ジェイン・オースティンを学ぶ人のために』 世界思想, 2007年.

- 榎本義子「『真知子』と『高慢と偏見』—結婚問題を通しての自己成長—」『フェリス女学院大学文学部紀要』26号, 1991年. 35-50
- エリオット・エンゲル著、藤岡啓介訳『世界でいちばん面白い英米文学講義』草思社, 2006年.
- 大内菅子「『高慢と偏見』J オースティンと社会意識：創作モチーフの解明のために」『相模女子大学紀要』68号, 2004年. 83-97
- 門田守「『高慢と偏見』における男と女：ヒロインの成長と父性主義の原理」『鳥取大学教育学部研究報告』43号, 1992年. 129-160
- 川口喬一『イギリス小説入門』研究社, 1989年.
- 川本静子『ジェイン・オースティンと娘たち：イギリス風俗小説論』研究社出版, 1984年.
- 小林章夫『愛すべきイギリス小説』丸善ライブラリー, 1992年.
- 坂田薫子「ベネット夫妻の言い分 ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』に見られる結婚の理想と現実」『日本女子大学紀要』58号, 2009年. 63-49
- ジェイン・オースティン著、阿部知二訳『高慢と偏見』河出文庫, 1996年.
- . 中野康司訳『エマ（上）』ちくま文庫, 2005年.
- . 中野康司訳『エマ（下）』ちくま文庫, 2005年.
- . 中野康司訳『マンスフィールド・パーク』ちくま文庫, 2010年.
- 白井義昭『シャーロット・ブロンテの世界 父権制からの脱却』彩流社, 2007年.
- . 『読んで愉しむイギリス文学史入門』春風者, 2013年.
- 田村道美「日本におけるジェイン・オースティン書誌—翻訳・翻案書物1—」『香川大学教育学部研究報告』120号, 2003年. 39-52
- 辻建一「もう一人のヒロイン —『エマ』論—」『大学院英文学研究会リーディング』18号, 1998年. 51-60
- 富山太佳夫『現代批評のプラクティス—3 フェミニズム』研究者出版, 1995年.
- 小山敏夫「アメリカの文化変容とフェミニズム—アメリカの理想と現実—」『関東学院大学』2000年. 139-153
- 直野裕子『ジェイン・オースティンの小説 女主人公をめぐる』開文社出版, 1986年.
- 夏目漱石『文学論（上）』岩波文庫, 2007年.
- 竹長吉正「野上豊一郎、精神世界の批評性：著書『西洋見学』を中心に The Style of Toyochiro Nogami and His Human Thought : Analysis of Seiyo Kengaku (in English : Our Travels in Europe)」『白鷗大学教育学部論集』8号, 2014年. 273-305
- 野上弥生子『野上弥生子全集第二二巻 はじめてオースティンを読んだ話』岩波書店, 1997年.
- . 『真知子』新潮社, 1966年.

- 樋口里華「なぜ、その人と結婚するのか ―インド都市部における配偶者選択の変化―」『九州国際大学国際関係学論集』7号, 2012年. 27-50
- 久守和子『イギリス小説のヒロインたち 「関係」のダイナミックス』ミネルヴァ書房, 1998年.
- 久守和子・高田賢一・中村邦生編著『英米文学にみる家族像』ミネルヴァ書房, 1997年.
- 廣田美玲『『高慢と偏見』論―保守的な制度との交渉―』『青山学院大学英文学思潮』78号, 2005年. 167-182
- 福田陸太郎編著『イギリス女流作家群像』駸々堂, 1983年.
- パトリシャ・インガム著、白井義昭訳『ブロンテ姉妹 時代の中の作家たち1』彩流社, 2010年.
- ヘレン・フィールディング著、亀井よし子訳『ブリジット・ジョーンズの日記』ソニーマガジズ, 2001年.
- 松本啓『ジェイン・オースティンの世界』近代文藝社, 2011年.
- 末森恵子「『高慢と偏見』における女性教育」『京都女子大学文学論叢』49号, 2005年. 23-36
- 宮澤邦子『90年代・女が拓く イギリス女性作家の半世紀5』勁草書房, 2000年.
- 山口美知代『『プライドと偏見』研究―世界諸英語時代の『高慢と偏見』―』『京都府立大学学術報告』65号, 2013年. 1-10
- メリン・ウィリアムズ著、鮎澤乗光・原公章・大平栄子訳『女性たちのイギリス小説』南雲堂, 2005年.
- Bride and Prejudice*. Dir.Gurinder Chadha. Perf. Aishwarya Pai, Martin Henderson. UK Film Council, 2004.
- 『高慢と偏見』監督ロバート・Z・レオナード. 出演者グリア・ガースン, ローレンス・オリビエ. メトロ・ゴールドウィン・メイヤー, 2006年.
- 『高慢と偏見』監督サイモン・ラングルトン, 出演者コリン・ファース, ジェニファー・エイル. IVC, 1995年.
- 『プライドと偏見』監督ジョー・ライト, 出演者キーラ・ナイトレイ, マシュー・マクフアディン. ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン, 2005年.
- 『ブリジットジョーンズの日記』監督シャロン・マグアニア. 出演者レニー・ゼルヴィガー, コリン・ファース, ヒュー・グラント. ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン, 2001年.
- The Jane Austen Centre, 2015年. パンフレット